

特別公開企画 立命館大学グローバル COE プログラム「生存学」創成拠点
「歴史の中における問い 栗原彬先生に聞く」

日 時：2007年9月6日(木) 13:00 ~ 17:00

会 場：立命館大学衣笠キャンパス創思館 403・404 教室

話し手：栗原彬

聞き手：立岩真也・天田城介・他

出来事 / 身体

身振りとしての出来事

集団疎開と『良寛さま』

「長崎の少年」

歴史のなかにおける問い

暴力への問い

水俣からの呼びかけ

民衆レベルの国際関係

ニューヨークにて

ベ平連、学園闘争

学問の位置

多様な政治

コミュニケーション

大本教

水俣

ボランティア活動 / 市民活動

水俣 人間の政治

水俣フォーラム 1998 -

水俣病展 2001年10月

水俣・高島展 1999年6月

水俣病患者たちのチッソとの自主交渉

新作能「不知火」水俣奉納公演 2004年8月

生存の政治

共生の政治

存在の現れの政治

実践的な身振りの論理

質疑応答

コメントと質問・1

コメントと質問・2

コメントと質問・3

栗原先生からのレスポンス

栗原彬 先生の紹介

専攻は政治社会学。1936年栃木県生まれ。1961年東京大学教養学部教養学科国際関係論卒業。1964年東京大学大学院社会学研究科修士課程修了、1969年同博士課程満期退学。武蔵大学文学部講師、立教大学法学部教授・明治大学文学部教授を経て、立命館大学COE推進機構特別招聘教授（「生存学」創成拠点）、水俣フォーラム代表、日本ボランティア学会代表。主著として、『やさしさのゆくえ 現代青年論』（筑摩書房、1981年）『歴史とアイデンティティ 近代日本の心理 = 歴史研究』（新曜社、1982年）『管理社会と民衆理性 日常意識の政治社会学』（新曜社、1982年）『政治の詩学 眼の手法』（新曜社、1983年）『政治のフォークロア 多声体的叙法』（新曜社、1988年）『やさしさの存在証明 若者と制度のインターフェイス』（新曜社、1989年）『人生のドラマトゥルギー』（岩波書店、1994年）『「やさしさ」の闘い 社会と自己をめぐる思索の旅路で』（新曜社、1996年）『「存在の現れ」の政治 水俣病という思想』（以文社、2005年）ほか多数。

特別公開企画

立命館大学グローバル COE プログラム 「生存学」創成拠点

歴史のなかにおける問い

栗原彬先生に聞く

日時 2007年9月6日(木) 13:00~17:00

会場 立命館大学衣笠キャンパス創思館 403・404 教室

(立岩) それでは始めましょうか。みなさんこんにちは。今日、栗原彬先生に話していただくことになりました。タイトルは天田さんが考えてくれました。「歴史のなかにおける問い 栗原彬先生に聞く」という企画になりました。

なんで、というのは、いくつかあります。栗原先生は、ご存じのように、この先端研、先端総合学術研究科の立ち上げの時から、非常勤講師をお願いして、集中講義に毎年来ていただいて、そこで教えを受けた院生の方もたくさんいます。それに加えてもう一つ外在的なというか、事情があります。これからお話ししていただくことについて栗原先生の方からたくさんいろんな資料を、いただいています、それ以外に天田さんのと、ぼくの原稿が混じっていて、その中にすこしそういったことについての言及があります。

栗原先生は立教大学に長くおられて、そして明治大学に移られ、そしてその明治大学の方もこの3月で終わられたのですが、退官を記念してというか、冊子を作るという話が関係者の方で持ち上がったんです。そして、この話が転がってというか膨らんでというか、世織書房というなかなかいい本を出している出版社があるのですが、その社長さんがぜひこれを世織書房で出したということになった。いろんな人が、栗原先生についてといふかな、書いた文章を集めて、それを出すっていう企画です。どこのへんまで進んでいるのかわかりませんが、そういう企画があって、それで天田さんも私も依頼を受けました。

そしてそこに、私は、時間もなかつたり大変失礼なことであるんですけども、ほとんど中身の無い文書を書いただけなんです、そこに少しこの間の事情は書いてあるんです。

あとでお読みください。なのですがつまり、去年のことですが、COE っものに応募しなくてはならなくなって、とにかく最初に聞いたのはリーダーは立派な先生でなければならぬ、と。それで立派な先生を探している過程で栗原先生をと考えつき、一同一件落着ということになったのです。ただその後、学内で働く人間をとというふうに言われ、それで不肖わたくしがやっている、と。ですが、先生には研究科開設以来加わっていただいたこともあり、また長いことお仕事なさってきたそのお仕事がわれわれのこの企画にかかわる、私たちがかわりたいということがありまして、COE の特別招聘教授という形で、今年度からお呼びしました。

それ以外に COE 関係の特別招聘教授としては、アフリカ日本協議会の代表の林達雄さん、4月の土曜講座で講演なさいましたけれども、その方と栗原先生ということになります。

COE の方は始まったばかりでどういう方に転んでいくのか、何が我々に見えるのか、これからですけども、それはともかく、いやともかくではなくて、その関わりで、これから先生のお話を伺い、そしてわれわれがそれを受けて、いろんなことを聞いて、話をして、という感じで進めていきたいと思います。

後でも少し話すかもしれませんが、今、本も何冊か持ってきて奥付を見たら、先生は1936年のお生まれだということです。不肖私は1960年の生まれです。記憶によれば天田さんが1972年ではないかと。ですから、36年、その次のひと回りは1948年ということ、ちょうど団塊の世代の人たち、ですね。社会学者だと、たとえば上野千鶴子さんなんかはたしか1948年だったと思いますけれども、それを一つまたいでその次が60年、われわれの世代っていうか、になる。そこからまた一回り回ると天田さん、ということ、今日はたまたま、3世代というか何ていうか、社会学の人が前のほうにいますが、この間、何があって、どういうことを先生が考えられてきたのか、こ

ういう社会のなかで。それをこうやって離れているようでもあり、さほどでもないようなわれわれが、一緒に、あるいは引き継いで、仕事をこれからどう進めていくのかということが気になる、考えたいと思います。

ということではなんらまとまりのない前置きでした。まずは栗原先生のほうに50分内外、お話をさせていただきたいと思います。では先生、よろしくお願いいいたします。

(栗原) はい、天田さん。

(天田) 立岩さんが言われたことで尽きていると思いますが むろん、別に年齢や世代がどのような意味を持ちえているのかはここではさしあたり措くとして、ある人は生まれ、そしてこの世界の中で生き、ある時代の中で生きていくわけです。

かりに12年を一回りとするのであれば、先生が1936年のお生まれで、次の世代は1948年あたりの団塊世代の人たちがいて、そしてその次の世代に1960年あたりの生まれの立岩さんたち世代がいて、更にその次の世代に1972年あたりに生まれた私たちの世代がいることとなります。そして、その一回り先に、1984年前後に生まれた現在23歳前後の、ここにも多く参加している大学院生の世代が存在していることとなります。むろん、この大学院には様々な世代の人たちがいて、それはそれでとても大切なことですが、乱暴に言えば、ひとまずはそのように言えるわけです。

すると、ちょうど5つの異なった世代が、異なった時代を生きた人たちがこの場にもともにいることとなります。残念ながら、1948年前後生まれの団塊世代の方々は今話をする中にはいませんが。そして、12年一回りとかりにするのであれば、5つの世代の人たち、それぞれの時代的・歴史的文脈を生きてきた人たちが各々で見えてきたものがあり、まさに栗原先生たちの世代、そしてそのあとの団塊世代、立岩さんたち世代、私たちの世代、そして大学院にてこれから研究をしていく世代の人たちが生きてきた現実があり、あるいはいかなる人たちとの関わりの中で、自らの生きてきた

時代的・歴史的文脈の中で何をいかに考えてきたのか、ということ一度きちんと押さえておくことができればと考えて、今回の企画を私が勝手に考えたというのが今日の研究会の発端になります。

とりわけ、これは私の個人的な関心でもあるのですが、栗原先生たちの世代がある時代の中で、何を思考され、考えあぐね、あるいはどのような方々との出会いの中で、自らのテーマを見つけ、そして自ら研究をしてきたのか、そして様々なことに逡巡されてきたのか、ということについて、われわれは率直に先生からお聞きし、そしてその上でわれわれが引き受けるべきもの、そしてその上で何を思考するのかを考えることができると思っています。

そのような背景から今回の企画を考えたというのが正直なところです。したがって、今回の研究会「歴史のなかにおける問い 栗原彬先生に聞く」というのも、そうしたコンセプトの中で考えた企画であると了解してもらえればよいと思います。

さて、本来であれば、栗原先生のプロフィールやご研究をきちんと紹介しなければならぬところですが、時間が限られているため、プロフィール等々については栗原先生から直接お聞きしたほうがよいかと思っておりますので、栗原先生にこれまで何をいかに学び、考えてきたのか等についておおよそ50～60分くらいでお話ししていただければと思っています。その上で、そのような栗原先生たちの世代の方々が考えてきたこと、主張してきたことを引き受けてきた世代でもある立岩さんや私がそのあと質問やコメントをさせていただきます。そのあと、できる限り、多くの院生の皆さんからも積極的に栗原先生に質問やコメントをしてもらい、活発な議論・討論ができればと思っています。せっかくこのような小さな規模の研究会で直接やり取りができる状況にありますので、相互の直接的なやりとりを基本にして進めていきたいと思っています。だいたいが時間を費やしておりますので、それでは栗原先生にお話しさせていただきます。先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

出来事 / 身体

身振りとしての出来事

(栗原)今ご紹介いただきました栗原彬です。突然『歴史のなかにおける問い』という課題をいただき、率直に言って用意がないものですから、わりと雑多な話になってしまいますが、どうぞご容赦願います。この『歴史のなかにおける問い』という問いは大変な問いですね。つまり『歴史についての問い』ではなく、『歴史のなかにおける問い』ということです。とすると、それは何事が自分史にかかわらざるを得ない、ということになります。ですから、そういう歴史と自分史の交差するところで立ち上がってくる出来事があるんですが、それはたぶん歴史の呼びかけというふうに言っていていいと思うんですけども、この場合の歴史というのは単一ではない。極めて多層的な歴史ですから、その呼びかけもまた多層的になっていく。そういうたくさんの呼びかけの中から自分がその呼びかけに応答するということがある。

つまり私にとってそれが出来事として歴史の中にあられてくる。それが出来事であるということはかなり大事なことでして、出来事というのは自分の身体とかかかわっていることなんですね。単なる情報じゃない。その出来事というのは記憶と結びついていて、繰り返し、出来事が自分の内側で反復されるわけです。これはもちろん状況の中で反復されるわけですから、たとえば10年前に同じ出来事を想起する。また、10年後に想起する。2つの想起は同じものではない。たぶん同じような出来事ではあるんだけどもそれが状況の中で書き換えられていくっていうことですね。多くを思い出すことによってまた書き換えられ、書き加えていったりもする。そういうふうな出来事をとらえるということになると思う。この場合に出来事というのは、アガンベンの言い方を借りればこれはイメージではない。イメージじゃなくて、身振りであるということ。つまり身体性をともなうということであり、そんな出来事が僕の中にある。

集団疎開と『良寛さま』

最近その想起が激しくなってくるので、そのことをまずお話しようかと思っています。それで、こんなことがありました。かつて岩波書店から薄っぺらくて大判のニューズレターのようなものが出たことがあるんです。読書関係の記事をのつけるパンフレットで、ある号で、「人生の中の一冊の本をあげろ」といわれたんですね。人生の中の一冊の本といわれても簡単に挙げられるわけがないし、そういうものがあっても絶対に言いたくないという気持ちもあったんですけども、私は正直にその本を挙げたんです。それは私が若いころに読んだマルクスでもないし、サルトルでもなくて、相馬御風の『良寛さま』っていう本なんですね。これは子ども向けに書かれたもので戦前の出版なんです。和紙で作られている美しい本でした。その中には挿絵の写りが載ってるんですね。良寛の伝記と巻末に良寛のうたが載っている。その本は私が集団疎開をしたことに結びついている。私は1936年生まれですから、戦争も終わりに近づいたころ、集団疎開で赤城山のふもとに集団疎開したんです。その当時で言えば第3師範の付属小学校、で、これは国民学校ということなんですけれども、その3年生ですね。それで上野から汽車に乗る。汽車に乗る寸前に、もと通っていた練馬の森の幼稚園の保母さんが見送りに駆けつけてくださったのです。そのときに『良寛さま』を手渡された。今でも先生が手を振ってて、汽車が駅を離れていく光景が焼きついています。その汽車の中で『良寛さま』を読んだ。子ども向けですし、活字も大きいし、すぐに読んじゃったんです。とても大事なものをもらったっていうか、そんな感じがしたんですね。

さて、そこから先の話があるんですが、群馬県の赤城山のふもとに新里村という村があって、今は桐生市に編入されたんですが、その新里の田舎の駅、無人駅に着いて、集団疎開先が祥雲寺というお寺なんですが、お寺に先に行っていた上級生たちがいるんですね。で、その上級生、5年生だったと思うんですけどね、6年生だったか、定かではないんですが、その上級生たちが迎えにきてくれた。それで駅ではじめて対面するんです。向かい合いで列を作って、挨拶をかわした。それで向かい合わせになった人たちがペアを作

る。で、上級生が下級生のリュックサックやなんかを持って、みんなでお寺に行く。だからペアになったもの同士が話をして、「君の名前なんていうの」とかそんなことを聞きながらお寺に行くわけです。私と一緒に並んだのは岡村さん、というひとでした。級長同士が先頭ですから、その岡村さんと一緒になって、歩き出したとたんに、岡村さんが「君、何か本持ってる？」っていうんですね。本が好きなひとだったんです。すぐに、今まで読んでいた本ですから『良寛さま』って本を持っています」とっていうと「僕に貸してくれない？」っていい、それから岡村さんと非常に親しくなりました。彼との間で『良寛さま』が行ったり来たりして、くり返し、『良寛さま』を読んだ。その本が置かれていた状況は、たとえば、当時は戦争中でしょう、私が住んでいた練馬区でも焼夷弾が近くに落ちて、大きなすり鉢状の穴が空いてたり、それでひとが死んだとも聞いていて、それから私が学校に通っていたときでも電車が止まって溝に伏せる、機銃掃射があったりする、そういうすさまじい状況ですね。戦争も末期ですし、東京への空襲もあって、もちろん地方へも空襲だらけだったわけですがそれでも、そういうような状況から逃れて集団疎開に行ったんですね。しかも集団疎開先っていうのはみんな飢えている。

こうした状況の中で、集団疎開というのが私が集団生活を経験した最初ではあったんだけど、二度とやりたくないすさまじいものですね。もちろん楽しい面もあるわけですがお互いに傷つけあうことが多い。そういう中で『良寛さま』を読んでいくとこれはある意味別世界であるわけです。それが岡村さんとの間で往復して。岡村さんとの、私にとってお兄さんにあたるような関係ですよ。その岡村さんが、不意に消えた。戦争が終わる、終戦の詔勅がラジオで流されたんだけど、そのとき岡村さんはお寺にいなかったんですね。というのは彼は肺結核になって前橋の病院に。みんなが気づかぬうちに。つまり戦争がもう終わっちゃったっていうことで、みんながそれぞれに自分の家に帰るのを待っている、その間に、その敗戦の日からそんなに時間が経てないうちに岡村さんが亡くなったという、知らせを受けるんです。私は本当に呆然としました。一番親しかったひとが突然消えて、死んで

いわれて。そして僕の手元には『良寛さま』が残った。だからその『良寛さま』という本は岡村さんの温もりを残して、二人の間で行き来した、この場所ではない、何か暖かい別の場所なんですね。それはなんとはいえいいのか、良寛さまの世界が共有されていたんだけど、そういうものが私一人に残されるわけです。これは私にとって大きな出来事だった。岡村さんと出会ったということと、岡村さんが亡くなったこと。

私はそれから以降、いくつかの小学校を転々とします。集団疎開先で一緒だった仲間とその後あまり会うこともなかった。たまたま偶然にあうこともあったけれども。しかし、その祥雲寺というお寺に行ってみたくてという気持ちはずっとあった。それでその機会が訪れた。足利の若い友人が車を運転して私を祥雲寺に連れて行ってくれた。もうそれは廃寺に近かった。ただお寺は変わらず古いままに残っていた。そのお寺の境内に立つと、大きな木があった。見覚えのある木です。その庭のこちら側に身代わり地蔵が二体立っている。対の像で、それも残っていました。しばらくそこにいた。それから何度か私はそこに行くんですが、そのお寺の畳敷きの本堂で使った朱塗りの長い座り机、そこでみんなが向かい合って勉強したり食事をしたりする、その長い机が外に放り出されていました。本堂の中は蜘蛛の巣が張っていてひとがいない。お寺の住持はもう出てしまっている。お寺はもうこれ以上続かないんだという。近所のひとが管理している、そういう状態だった。その場に立つということ。そのときに大きな木の下に子どもが立っている。幻視ですけども、そういうものを私は見た。それは岡村さんのようでもあり、自分のようでもある。

「長崎の少年」

こういう光景が、私がかいりんなことを考えていくときにくり返し出てくるひとつの記憶ですね。そのことを再現させられたのが皆さんのお手元にある写真「長崎の少年」なんです。これは私が「共生論史」の授業の中でテキストとして取り上げてみんなにも読んでもらったものなんですけど、ご存知の方も多いと思いますが、簡単に説明しますと、ジョー・オダネルという

アメリカのその当時 23 歳の従軍カメラマンが、戦争が終わって、原爆投下から 1 ヶ月も経たないうちに、佐世保から上陸します。そして原爆を落とした長崎で米軍の命令で写真を取りまくる。8 月 9 日の長崎の原爆投下から 1 ヶ月と経っていない 9 月初旬の時期ですから、その少年の足元に穴が見えると思うんですが、これは焼き場です、即製の。即製の焼き場に死体をリヤカーに積んできて、焼きにくる人たちがたくさんいたんですね。それで穴の中ではマスクをしたたぶん役人なんでしょう、何人が死体を焼く仕事をしていたんです。それを丘の上からオダネルが見ていた。そしたら赤ん坊を背におんぶした少年がやってきたんです。

少年は焼き場のふちに立って、直立不動の姿勢ですね、直立不動の、気をつけ、の姿勢です。こういう姿勢をじーっと保っていたんです。オダネルは非常に奇異に思って丘を下りていく。それでこの写真を撮ったんです。穴の中で働いていた作業員たちがこの少年のそばに行っておんぶ紐を解く。おんぶされて眠っているように見える子ども、弟か妹かはよくわかりませんが、多分弟らしいこの子を穴の中へ抱えおろして、火をつけるんですね。それではじめてオダネルはああ、このおぶわれていた子どもは死んでいたんだってわかるんです。その間この少年は直立不動の姿勢を保って、弟が灰になるまでじっと見ている。弟の火が消えると、少年はくると背中を向けて、その場を振り返ることなく立ち去った、という。オダネルにとってはこれは非常に記憶に残る出来事となる。23 歳という年齢を考えてもそうなんでしょうけれども、若者がある一瞬に他者と出会って、しかもファインダーをのぞいて、この一枚を撮ったということです。無数の写真が撮られているんですが、彼の中でもっとも大事な写真になる。オダネルはその後、日本を訪ねる。ずいぶん経ってですけども、この少年を探すんです。しかし探せなかった。何度か足を運ぶんですが、今年になってからこのオダネルが亡くなったというニュースが小さく新聞に載っていました。

「長崎の少年」の直立不動の姿勢を巡って、院生たちに考えてもらったり議論したりしたわけですが、これはもちろん天皇への敬意を表す姿勢、です。これは公的な場面での公的な儀礼と関わっているひとつの姿勢です。これは

天皇制のハビトゥスでもある。しかし、オダネルの言うように、戦争中の軍事教育はすごいもんだ、幼い少年に直立不動の姿勢を焼き付けたじゃないかという、しかしそれだけで済むのか、ということです。この子は弟の弔いに来ている。弟の弔いという私的でありながら公的なものの立ち上げに。この少年は自分の立ち方を選んだ。その立ち方は教え込まれた直立不動の姿勢でしかあり得なかった。弟への敬意を表す姿勢というのはほかに持ちようがなかった、だとすると、仮に直立不動の姿勢というのは皇国少年のハビトゥスであるとしても、そのハビトゥスというのは、単純に天皇制教育の反映であるというだけではなく、そのハビトゥスのなかに、せめぎあって、交錯して、激しく戦いあっているものがある。それは、ひょっとしたら天皇性国家に対する対抗性というか、異議申し立てすら含んでいるかもしれない。せめぎあうものがあるとすれば、それは少年の、この結んでいる真一文字の口とか、あまりにかみ締めたために血がにじんでいる唇とか、それからこの目の曇ったようす、たぶん必死にこらえている涙の目などに現れている。そうするとブルデューが提起した平べったいハビトゥスの概念は書き換えなければならない。

「長崎の少年」を私が見たときに、「あ、私がいる」というふうに思ったんです。実際この少年は10歳くらい、とオダネルは見ています。わたしの歳に近い。更にこの坊主頭、それから着ている服とか、半ズボン姿ですね、それと、弟をおんぶしていたり、死が近くにあった、こういうことがまさにこれは私自身である、といえるのです。映像の中に出来事性が立ち上がってくる。どうしてか。それは、この少年は私でもありえた、という感覚です。見た瞬間にそう思った。初めてこの写真を見たのは1995年ですから、戦後50年です。戦後50年に、坊主頭で集団疎開した少年と「長崎の少年」が重なった。それはアイコンでもあり、身振りとしても私の中に在る。その後いくつもの戦争や、難民キャンプの映像の中に、「この少年は私でもあり得た」という身体感覚が甦ります。それは私の身体をメディアとした歴史の身振りではないのか。

歴史のなかにおける問い

暴力への問い

私は、東大の教養学部の教養学科、国際関係論で学びました。国際関係論で勉強しているときに江口朴郎さんというすごい先生がいた。西洋史の先生で、国際関係史という授業をもっていらっしゃった。その先生がくり返し言われることがいくつかあって、彼の講義の中で例えば第2次世界大戦について語る。そのときに、ファシズムが、それとも自由主義の国か、というような見方ばかりしてはだめなんだ、といわれる。たとえば中東の視座から第2次世界大戦をとらえる。そういうふうな見方が必要なんだとくり返し言われる。それからその先生がたとえばカントの『永遠平和のために』を講義されたし、その画期性を説かれている。その当時『永遠平和のために』を読んでみたけれど、全然なんともないわけですね。私にとって。でもカントのすごさっていうのは後にわかってくる。そういう江口先生との出会いというのか、教えがあった。国際関係で勉強したことで自分にとって意味があったのはそういう江口先生との出会いを通してですね。

そういうことが、例えば『良寛さま』というあの本が自分にとっての一冊の本だというふうに、言えるようになってくるということとどこかで接点があるのでしょうか。だからそこを平和への問いなどと言いたいところですが、実際はそうではないのです。平和をむしろ妨げるものについて、それを正すということ、その暴力への問いというか、むしろそういうことが私には当時の問題意識だったですね。それで、60年安保闘争にかろうじて引っかかった。私はかなり安保闘争については勤勉だった。セクトでもなんでもなかったけれども。駒場から代々木公園に集まるんです。そこからデモンストレーションをやる。国会近辺にデモをかけるんです。代々木公園に集まって行くというときに人数が少なくても私はいましたからね、だからたいていはデモに行ってるんです。そのなかに榊美智子さんがいた。榊美智子さんもとても勤勉な人で、ほとんどのデモが一緒なんです。彼女とスクラムを組んだこともあります。そういう意味では体温を感じるという同志的な関係の中で、言って

みればひとりよがりではあるんだけど、そういう闘いに共に出ていった。その樺さんが殺された。近い人が消えてしまった。樺さんは特定のセクトに入っていました。だからその意味では遠さ、ということもあるんですね。わたしはセクトでも何でもなかった。スクラム組んでわっしょいわっしょいといってやるジグザグデモが大嫌いで、それが始まると外へ出てしまうという日和見ですけど、樺さんはそうじゃないですね。だからそういう意味では遠い人でもあり、かつ近い人だった、その人が突然殺される。それでここで、「私でもありえた」が出てくるんです。こういうことがくり返しくり返し出てくるわけですね。樺さんの死というのは私にとっては忘れがたいです。樺さんの死は、平和のために戦った闘士の死なんていうものではない。もっと身近な、身近であって私は尊敬してた人ですが、そういう人が死ぬということは、あとから合理化したのかもしれないけれども、岡村さんの死ということとつながって見えてくる。これが一つです。

水俣からの呼びかけ

それからもう一つは、その当時水俣からの呼びかけがあったんですね。だけどこれは恥ずかしい話だけれど、私の中には入ってこなかったんです。出来事として、身振りとして入ってこなかった。水俣のことはメディアが報じていたことは明らかです。私はたとえば水俣病の原因物質についてマンガン説を唱えて、有機水銀説は間違っているという、東京工大の教員の論文が載っていて、それを読んだ記憶があります。そういう水俣関係の記事というのは、その当時安保が前面を占めていても、載ってはいったんです。三井三池の記事も載っていた。だけどそれは私の中に入ってこなかったんです。呼びかけを聞き落としている。それは素通りしている。私は安保で目が一杯だった、ということになるんだけど、しかしこれは私が感受性を欠いていた、ということなんです。

後に、1969年に石牟礼道子さんの『苦海浄土』が出ました。第五章の中に「さまよいの旗」という節がある。それは安保のことを取り上げている。安保改定阻止国民会議が全国で組織されて、水俣でもそれが組織されて、安保改定

阻止水俣共闘会議が組織された。それでチッソ水俣工場の隣の水俣第二小学校の校庭で集会を開く。4000人が集まったというんですね。安保反対を唱えた。その4000人のうちの3000人がチッソの工場の工員なんです。1000人が水俣市民です。その4000人が氣勢を上げて安保反対、とやって、さてデモに移ろうとして小学校の門を出るんです。すると出合いがしらに漁民たちのデモとぶつかる。水俣病の原因がチッソにある、チッソの工場排水の垂れ流しにあるということは、当時は公認されていなかったにせよ、漁民たちにははっきりしていた。それで、チッソに異議申し立てに行ったわけですよ。それですげなく追い返されて、300人くらいがデモというか、流れ解散というのかでとぼとぼやってきたのです。大漁旗、船に掲げる、をめいめいが持っている。小さなデモが安保のデモと出合いがしらにぶつかった、そのときに安保のほうのリーダーが「みなさん、漁民のひとたちが安保のデモに合流されます」といったんです。それで「みなさん、拍手でお迎えしましょう」といったわけですね。それでみんなは拍手したんです。そしたら照れくさそうに漁民たちが4000人の中に飲み込まれていった、というんです。そういった光景を石牟礼さんがとらえている。石牟礼さんはそのときになんでこのリーダーは、「みなさん私たちも漁民のデモの参加しましょう」といわなかったのか、と思うんですよ。これは感受性の問題でしょう。

だからわたしもまさにリーダーと同じだったんですね。そういうことが1960年の安保を巡って自分の中に起こったことでした。そのとき、私は迷っていましたが、就職を一度決めるんですね。商社に就職して会社に行きだした。だけど結局4ヵ月でやめるんです。商社の上司から「商社というのは人付き合いだ。人付き合いが勝負だ。だからそんなボサボサの頭ではなくて、ポマードくらいつけて来い」といわれたんですよ。その当時は柳屋のポマードくらいしかなくて、それがいやなにおいがする。思い浮かべたとたん「私はやめます」と言ってしまったんですね。

それでやめて、半年研究生で置いてもらったあと大学院に行くわけですよ。この時期に、エリクソンのアイデンティティ論を読んだんです。ハーバード大学の大学院に留学中の友人がいたんですが、ちょうどエリクソンがハーバ

ードで講義をしていて、彼女がエリクソンの出たての本にサインをもらって、それを送ってきてくれた。とんでもない時期にとんでもないものを読んだんです。それですっかり混乱した。しかし、アイデンティティという考え方を知ることができた。

民衆レベルの国際関係

大学院に戻り、取り組んだのは「大本教の国際交流」です。大本教というのはご存知でしょうか、明治 25 年に開教した新宗教です。この宗教は京都府の亀岡と綾部に聖地がある。福知山に生まれ育った出口なおというおばあさんが神がかりして開教する。それからかなり年が離れている若い宗教者の出口王仁三郎、当時は上田喜三郎といって、後に出口家に入るんですけども、そのおばあさんと、まあ青年というにはもう年長で、いわば引き延ばされた青年期を生きていた若者の、そういう 2 人が出会って大本教を作っていく。

これはとてもおもしろい宗教です。この宗教の面白さを知ったのは梅棹忠夫さんの『日本探検』という本なんです。そのなかに大本教の記述があった。戦争中に世の中の立替え立直しと平和を求めて、それで不敬罪にあたるとして弾圧を受けた。大正 10 年、昭和 10 年と 2 度の弾圧を受けるんですね。獄に投じられても獄中で転向をしなかった。共産黨員はずいぶん転向したけれども大本教の信者の転向は少なかった。だから信者が拷問されて当時亡くなった人がたくさんいた。

戦後、大本教は復活して平和運動を進めました。その当時の私の考え方としては「民衆レベルの国際関係」、これをやりたい、これは安保闘争の中心軸でもある、それがありません。明らかに国際関係を踏まえたとの安保闘争だったんです。だから「民衆レベルの国際関係」、といった問題の立て方もあるのではないかと、それでそこに大本教を持ってくる。大本教はエスペランティストです。国を超えてよその国の新宗教と手を結んだ。よその国の新宗教も、すべて大きな宗教から弾圧を受けている。時の権力から弾圧を受けている。そういうような宗教ばかりですね。それで横に手をつないで権力

と闘った。

そんなことが見えてきて、大本の本部に泊り込んで、毛布一丁借りて、ずっと資料をあさって、大本の人たちと話をしたり、それがわたしの最初のフィールドワークですね。その当時、大本教を主題に修士論文を書くということに指導教員からものすごく反発を受けて、そんなくならないものを論文に取り上げるのだったら、私はもう面倒は見ない、と言われて、面倒を見てもらわなくてけっこうですとか言い、喧嘩しながら書いた。

だけどその指導教員がとてもいいアドバイスをくれた。それは僕の勉強したいことを聞いていて、だったら社会学の高橋徹氏の授業を聞きに行ったらどうだろうかといわれたんですね。高橋先生の講義を聴いて、はじめて社会学ってこんなに面白いものか、と知りました。そんなこともあって修士の論文を書いた直後くらいに、結局大本教で書きちゃうんですが、ニューヨークのコロンビア大学の大学院に留学するんですね。

そのとき実はわたしはライト・ミルズのところで勉強したかったんですね。しかし、そのための勉強をしているときにライト・ミルズが急死する。彼はアメリカを批判しまくっていた男です。コロンビア大学に行く理由を失った。それでも、高橋先生はハーバードよりコロンビア大の社会学の方がいいよ、と言われる。たまたま、その高橋先生がコロンビア大学にしかも同時期に留学されるんですね。それで、高橋先生と一緒にコロンビア大学で、先生と机を並べて勉強することになる。高橋先生と私は、10歳くらいちがうんですけども一回り上の先生ですね。

ニューヨークにて

当時のコロンビア大学の社会学の大学院というのは、その中心が中範囲の社会理論を唱えたロバート・マートンなんです。あとエマニュエル・ウォラステインとか、テレンス・ホブキンスといった人たちがすごく若い。まだ若くてワールドシステム論をやる前の人たちですね。2人は共同して、比較政治社会学のものすごくいい授業をしていました。それからホアン・リンスって政治社会学者もいた。ホアン・リンスは比較政治の講義を始めたば

かりで、スペイン語なまりのひどい英語を話していましたけれども、力のある授業をしていました。こういった人たちからものすごく刺激を受けましたね。

後には、ティーチ・インが起こる。ティーチ・インというのは、ベトナム戦争はか非かという問題が中心なんですけれども、アメリカ社会と権力システムそのものに対して、学生反乱が起こってきます。黒人たちの異議申し立ても進行してきます。そういう問題を巡って大学でのティーチ・インやカーネギーホールでのシンギング・インなどが開かれた。『いちご白書』をお読みになるとその当時の雰囲気がよくわかりますけれども、そういう真っ只中に入っていったんですね。高橋先生もそれから私のパーソナルアドバイザーのハーバード・パッシンという日本研究の社会学者も、口をそろえて参加観察法を説かれた。当時支配的だった構造機能分析へのアンチテーゼですね。

ある日、ニューヨークの5番街で反戦デモをやった。それに私も参加した。コロンビア大学の学生もみんな参加した。通りを歩いていると「レッドチャイナ、ゴアホーム」とか言われて、卵をぶつけられたりするんですね。そのときに私はかなりムツとしたんですが、「アイムジャパニーズ」と言い返してしまうんです。そういいながら、自分の中のナショナリズムというのがあるのかな、なんて思いました。そういうやり取りをしながらデモンストレーションしてたら、「栗原がんばれ」って日本語で聞こえたんです。えっ、と見ると高橋先生が沿道に立って手を振っている。つまり先生はデモを観察してるんですね。参加観察法というけれど、あれ、おかしいな、参加しているのは私で、観察しているのは高橋先生で、これはどういうことだろう、ということですね。そういうおかしいことまで含めて、1960年代半ばにティーチ・インのような活動があった。

ベ平連、学園闘争

それは同時に日本で言えば1965年に、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合 64-74）が出発します。それで最近亡くなったけれども小田実がその主導をする。このベ平連というのはすごく大事な組織論、組織的でない組織

論を持っていました。この指止まれ方式なんですね。自分がやりたい人がやる。ある役割、例えば会計系の役割を固定すると、そこに必ず権力が附着する。だからそういう役割はローテーションでまわすことにする。それから運動体の本部を作らない、だから神楽坂のべ平連の事務所は本部ではなかったんです。連絡場所である。それに徹したわけです。

それから、身体を動かすということですね、運動とは、身体を動かしてやること、口先ばかりではだめだということですね。それからあと、組織論として言えば、要するにツリー型、ピラミッド型ではなくて、リゾーム（地下茎）型である。その当時、クリストファー・アレグザンダーというアメリカの西海岸の建築家が都市論・建築論として言い出した。ちょうど60年代半ばくらいに、そういうネットワーク型の活動体を造ったんですね。

ですから、課題が達成されたら止めることも大事だということで、幕引きをきれいにやったんです。そういう不思議な組織体が活動していた。たぶんそれにちょっと似ているようなヤング・ラジカルズの運動を私はアメリカで経験している。だから日本に帰ってからべ平連を調べればそういう新しい活動体のことがよく自分の中でわかってきたんですね。

日本に帰ってみるともうすぐに学園闘争に巻き込まれていくんです。私の指導教員のいる国際関係論へ一度戻ったんですが、関係は悪化するばかり。私はエリクソンのアイデンティティ論に導かれて「歴史における存在証明を求めて」という論文を書きましたが、その発表形式をめぐる、私には理不尽と思われる指導教員の要求を拒絶したために、国際関係論を追放されるようにして、社会学研究科に、高橋先生のゼミに転出しました。

学問の位置

その頃学園闘争に遭遇するでしょう、あらゆる権力とか権威とかそういうものへの疑いということが学園闘争のポイントですからね、それで第一に、社会学について言えば社会学のふり幅というものがものすごく広がる。なにを対象にしてもいい。だから私たちが一緒に学園闘争に関わった例えば今防人という社会学者がいますけれども、彼なんかはジョルジュ・パタイユ論を

書いていますね。ジョルジュ・バタイユ、今だったらちっとも不思議とかわないでしょうけれども、その当時では考えられないことだった。社会学の中でそういった思い切ったことができる、雰囲気が出来たんですね。

それからもう一つは、「歴史と学問との共振」という、その関係が問われた。『何のための学問か』、というストートン・リンドの有名な本がありますけれども、学園闘争の中でみんな読みました、その当時。つまり学問ということと実際の生きている現実とのその関係というものはどうなのか、そういう問いです。

多様な政治

それから、二番目は私たちは多様な政治を学んだということですね。つまり政治といえば安保闘争のときの敵の政治です。だから統治や支配しか政治と思っていなかったのです。

学園闘争のころに立教大学の助手になります。シニアの専任教員と組んで2人で担当するゼミ形式の1年次生向けの基礎文献講読専任の助手なんです。教える義務がある。そういう特異な助手です。そこから立教大学の教員になっていくんですが、立教大学に迎えてくれた法学部のスタッフの中に、政治学関係の教員たちがいて、その中にベ平連の中心だった人たちがおられた。政治学者の高畠通敏さん、中国政治思想史・中国政治研究の野村浩一さん、それから『近代日本の精神構造』の神島二郎さん、みんなベ平連やってた人たちですね。その人たちが私を迎え入れてくれた。私の希望を聞いて、政治社会学という科目を新しくつくって下さった。そこで、法学部の中の政治関係の科目として政治社会学を持つことになったんです。

そういう中で高畠さんの影響はずいぶん受けましたね。高畠さんは「思想の科学」の事務局をやっていた人で、それに60年代半ばからベ平連の活動が始まる、そういう中で政治というのは例えば統治だけではないんだということが明らかになってくる。政治には階級闘争まで含めて闘争、という側面があります。それから政策という側面。もう一つは自治です。自治、これは市民主体の政治です。そういうものが多様に自分の中で開けてくる。しかも

これは学園闘争と関わっている。立教大学でも学園闘争が起こります。法学部の教員たちは学生の言い分に理を認めていた。だけど学生が校舎を占拠する。占拠されてもかまわないんですけど、そこにセクトが入る。セクトが入り込んできて肝心の立教生が消えちゃった。そういう状況の中でも、警官隊を導入してセクトを追い出すっていうことをしなかった。それで高畠さんとか、神島さんたちがヘルメットをつけて、自ら乗り込んでいって解体したんですね。それは言ってみれば自治、というふうにいっていいでしょう。そういう学園闘争の経験の中に私もあったということになるんです。

コミュニオン

それから三番目にその当時いくつかコミュニオンに行きました。岸田哲さんという今はあじさい村というコミュニオンに住む人が、私たちを連れて行ってくれたんです。いくつかのコミュニオンに行きました。学園闘争で挫折した人たちが集まって、若者のコミュニオンをたくさん作ったんです。その中にはほんとうにコミュニオンとして鍛え上げていくコミュニオンもあったけれども、多くが学園闘争崩れの男の子だけがだいたい集まるんです。コミュニオンができて、まず理論的な総括をしようとかいうわけ。そんなのでコミュニオンが成り立つわけがないですね。それからお金の問題が起こります。私たちが見に行った神奈川県厚木の振出塾でもそうでしたけど、昼日中にごろごろして寝転がっている男の子がいる。一方、土方仕事をやって日雇いの仕事をやって、日銭を持って帰るやつもいるんですね。一方でごろごろしているやつがいて、他方で必死になって働いているやつがいて、そういうところで金の問題が起こるのはある意味で当然ですよ。それから男が多かったのですが、そこに女性が入るとペアが生まれる。そうするともう分解しちゃうんですね。金と女でつぶれる。若者のコミュニオンが多かつぶれていく、ということまで含めてコミュニオンを見せてもらったんです。

大本教

それから第四に、再度私は大本へコミュニオンを求めて行くんですね。大本

というのはわけがわからない宗教です。まして一方でアイデンティティ論を勉強するでしょう、しかし、大本のアイデンティティなんて全然わかりませんよ、めちゃくちゃですよ。ファシズムかと思えばアナーキズムも社会主義もあります。ナショナリスティックであるかと思えば、コスモポリタニズムで、エスペランティストたちが多いのです。他方では国粹主義者もいる。ほんとうにわけがわからない。しかし、大本教は楕円の二つの焦点を持っている。それは出口なおという開祖と、それから後から入った出口王仁三郎という、2つの焦点ですね。

2人は全く対照的な性格ですね。なおはものすごく厳しい、謹厳実直、正義の人です。王仁三郎の方は春風駘蕩っていうか、ある意味でかなりいい加減な人ですよ。愛の人と言ってよい。そういう2つの、2人の楕円の焦点を持っているような宗教です。「建て替え建て直し」ということが教義です。もう一つありますね、「万教同根」という、よろずの教えが一つの根から出ている、という教えですね。だからみんなが、すべての宗教があるいは思想が、平等で、仲良くしなくちゃいけないという考え方です。ですから平等主義と平和思想ですね。建て替え建て直しの教えというのは「高山をひっくり返す」という比喻でいいますけれども、天皇制機軸、天皇制のツリー型の構造をひっくり返さなければならない、という教えなんです。反天皇制という点で筋は通っているんですね。だけど例えば白馬に出口王仁三郎が乗って信者たちを閲兵するといった怪しげなことをやるわけです。政治体制にある意味で擦り寄る、だけど擦り寄って行きながらもそれを内側からひっくり返すという構図ですね。そういうことがようやく見えてきました。ものすごく矛盾してる、いろんなものを孕んでいる。だけどより共生的な社会への立替え立直しに真っ直ぐ向かっていく、そういう宗教であることが再度訪れることでよくわかった。

だけど同時にその問題は大本という宗教内部の現実の問題でもある。つまり、ツリー型の組織を志向する権力派が大本の教団を牛耳るようになるんです。それに対して若い人たちが反旗を翻す。異議申し立てをする。私も大本に足を運んでいる間に若い人たちと親しくなっていくって、昔の大本のことな

ら私の方が断然詳しいわけですが、若い人たちに大本の原点について語る機会がふえました。そのうちにみんなが栗原教なんていいましたけれども。そういう若い人たちの教団改革ということと関わりをもつようになる。大本だけではない。いくつもの宗教で、1968年を起点とする宗教改革が進行しました。

水俣

既成の価値を問い直す状況の中で、水俣とのかかわりが初めて出てくるんですね。石牟礼道子の『苦海浄土』を読んだことがきっかけです。学園闘争の中で、水俣病問題に取り組んでいる学生たちがいたんです。学園闘争と70年安保に取り組んでいる時に、水俣病の問題で集会を開く、そのことは若者にずいぶんと刺激を与えたと思いますね。立教大学の教員になってから1970年代後半に水俣の実践学校に参加しました。若い人たちと一緒に。そのときのこと、実践学校に参加している人たちは若い支援者が多かったのですが、その人たちが坂本しのぶさんのところに寄ったとき、カメラの放列をひくんです。当時のカメラって音がするんです。しのぶさんがパシャパシャパシャ音をたてる中に立ち尽くすというか、座りつくすというか、さらし者のように見えてきたんですね。いたたまれないで森永都子さんとその場を出たということがありました。このことを、患者さんたちは密かに支援公害なんて言っていたらしい。集団としての支援はすまい、という私の気持ちが決まった時でしたね。自分の立ち方が最初に水俣に行ったときにそういうふうになってしまったのがいいことか悪いことかわかりませんが。支援者が集合体として立つなら、患者も「水俣病患者の皆さん」一般なんですね。安保闘争の人たちが「皆さん、漁民の人たちが合流されます」と言った「皆さん」に照応しているということです。支援者たちが水俣病患者の皆さんという。水俣病患者の皆さん、ひとグループですね。そうすると患者のほうもそれに合わせて患者らしい仮面をつけるんです。患者として対応する。人がいい人たちですからね。

医者の方原田正純さんと患者さんの家を訪ねることがありますが、そうすると、原田先生がいうんですね、「昔はね、水俣病患者をどうしても水俣病闘

争という目から見ていたな」と。もちろんひとりひとりの病状が違うわけですから、そのひとりひとりを診るんですけれども、それでもまだ水俣病患者という一組で見てたな、と言われるんです。ひとりひとりがようやくみえるようになったって、原田先生がおっしゃって私はひっくり返る思いをしましたけれども。

ボランティア活動 / 市民活動

80年代に入ると、80年代の初めごろというのは、ボランティア活動と、名前を持たない市民活動が合流しはじめる時期なんです。ボランティア活動というのはたとえば日本青年奉仕協会、で、その名のとおりで、奉仕という名称でいわれる。末次一郎という、在野のフィクサーが、戦後、日本青年奉仕協会に拠ってボランティア活動を作ってきた。若い人たちのボランティア活動がフィクサーであり、ナショナリストであり、天皇制主義者の末次一郎によって形づくられてきた。他方で、福祉国家が解体してゆく1970年代に、生活防衛のための市民活動の基盤が作られてきた。これは市民運動とは違うんです。運動としてではなくて、市民活動として。ただその市民活動という言葉もなかったんですね。そういう時代に市民活動がボランティア活動と合流する。

先駆的な市民活動の一つに、奈良の「たんぼぼの家」という障害者の自立の家があります。たんぼぼの家の理事長が播磨靖夫さんで、もと新聞記者だった。奈良に障害者自立の家をつくって、アートと障害者の生との出会いを企ててきた。80年代前半にそういう人たちとの付き合いがはじまる。私たちはネットワーク研究会を立ち上げました。ネットワークという言葉はリップナックとスタンプスという2人の人たちの著書『ネットワーク』から取った。これは市民のネットワークによってアメリカの社会と国家を書き換えていこうという壮大なプランです。

80年代のちょうど半ばくらいから、「ネットワーク研究会」、「ネットワークワーカーズ会議」、そしてその延長上に「日本ボランティア学会」を立ち上げていった。10年ほど前、ですけれども、日本ボランティア学会が立ち上

がる。NPO 団体が単位ではなくて、個人単位なんです。学会を立ち上げる
とき、奈良で開いた準備会で、車椅子の障害者の方に「ボランティアなんて
いないよ」といわれたんです。ボランティアなんていないよといわれて、
それでもなお、なぜ、私はボランティアか、という問いが突きつけられた。
ボランティア学会を設立総会の開会のときに宇井純さんが参加されました。
宇井さんは水俣で私のやってきたことはボランティア活動だっていわれた。
この言葉が若いひとたちをどれだけ励ましたことか。

水俣 人間の政治

水俣フォーラム 1998 -

80年代に水俣との関わりが具体的な形を取り出すんですけれども、そのことは時間の関係で省きます。水俣とのかかわりの中で、現在各地で水俣展を開く活動をしている「水俣フォーラム」という集まりがあります。水俣フォーラムは税制上の優遇措置を得たNPOです。1998年から活動を開始しました。私は代表を今務めています。

水俣フォーラムを作るときのきっかけになったことが、すごく重要だと思います。それをお話しますけれども、1996年、これは水俣病40年の年です。1956年に水俣病が公的に記録された。それから40年の96年に「水俣東京展」を品川の空き地で開いたんです。水俣病事件とは何なのか、を説明する映像とパネルを作って、かなり大規模な展示会としてやったんですね。開会の前夜に、「出魂儀」という儀礼を石牟礼道子さんや杉本栄子さんら水俣の人たちを水俣からお呼びしてやる予定だった。出魂儀というのは魂を出す儀礼です。これを言い出したのは水俣東京展の実行委員会です。その呼びかけに応じて、石牟礼道子さんがこの出魂儀のプログラムを作るんです。そのプログラムによると白い装束をつけて儀式が行われる。日月丸っていう打瀬舟を水俣から運びました。平底の漁船で、解体寸前の老朽船です。それに緒方正人さんが水俣から乗って、品川沖まで乗り付けて品川沖から会場のその品川の空き地に運んで雄大な帆を張った。白衣の患者さんたちがその打瀬船へ向かって歩き、火を灯していく。水俣から亡くなった患者さんの魂をそこにお呼びする、とい儀礼です。そういう儀礼のシナリオが実行委員会に届いた。

そしたら実行委員の中にこういう宗教的なことに実行委員会は関わることができないと言い出す人が出てきたんです。複数のそういう人たちが出てきた。それで実行委員会主催でこの出魂儀をすることがきわめて困難になった。実行委員会がもし主催してやるならば、私たちは水俣展への協力から手を引きますっていう人たちが出てきた。それは例えば物産部とかそういう重要な部分を担っている人たちです。この人たちがやめたらもう水俣展は成り立た

ない。水俣展開会の寸前ですからね。実行委員会のなかで、これをどうしようか、と話し合って、激しい議論もあった。

いやこれは宗教じゃない、特定の宗教じゃない、新宗教でもないし、既存の宗教でもないわけですね。私も含めて、宗教ではないという反論をしたわけです。だけど、宗教で何故悪いという言い方もまたありえたでしょうね。だからいろんな議論がそこにあったんだけど、とにかく、市民たちの拒否権発動ですよ。参加している市民の中のかなりの人たちが拒否権を発動して、実行委員会が主催できないということになった。やむなく実行委員会の有志が協力する、そういうことに落ち着いたわけですね。そのことを水俣の人たちに伝えたわけですよ。石牟礼さんをはじめとして水俣病者をどれだけ傷つけたことか。失礼でしょう、実行委員会がやってくださいとお願いして、それで主催できない、という。言ってみれば水俣の人たちで勝手にやってください、それに有志も協力します、という、今から考えるともうぞっとするようなことを言ったんです。評議員の1人としてそういう決定の場に私もいたんです。そのことは水俣病の人たちをすごく傷つけた。私も傷ついた。

1996年から2年後、98年に水俣フォーラムを立ち上げたんですが、その時に若い人たちが来て、代表になってくれといわれた。活動でその時に私が真っ先に言ったのはこのことですね。このことをクリアーするような活動でなかったらやらない、といったわけです。水俣フォーラムはこの時期をどういうふうにして自分の中で清算していくのか、自分を変えていくのか。そこから水俣フォーラムが始まった。水俣フォーラムはその東京展だけでは終われないんだと。それで各地域で開いていくべきだと。各地域からのまた要望もあったんですね。私はほとんどの地域の水俣展に出ているんですが、水俣フォーラムに関わるようになってから、私自身にとっては3つのことが自分にとっての大きな出来事になるんです。

水俣病展 2001年10月

まず、自分の立つ位置を身体的に学ぶことが多かった、ということです。2001年に水俣で水俣病展を開きました。患者の遺影も、500の遺影がそこに

展示される、そうすると自分のじいさんの写真が出ているわけでしょう。もう水俣病を忘れたと思っている。そこに、じいさんの写真がある、出ているということになると、その家が水俣病の家族だということをもう一回蒸し返すことになるでしょう。だから「寝た子を起こすな」といういい方で、現地でも反対があったんです。そういう中で、やっぱり水俣病展を水俣でやるべきだということについて、しっかり支えてくれた患者たちがいるんです。その中心が緒方正人さんですね。遺影なしでは、水俣病展は成り立ちませんから、例えばじいさんの写真が出るのがいやだという場合にはその方は展示しない。黒い紙で覆う、という形で展示したんです。

準備会の席上でも、いろんなグループが集まったわけで、水俣病展に賛成する人もいれば反対する人もいる。そういう中で緒方正人さんが言ったのは、「自己紹介を肩書き抜きでしょう」ということでした。自己紹介をするときに、自分がどういう団体に属しているか、とか、なんとか大学の教授だとか、そんな身分とか肩書きだとか、そういうものはなしにしようと言ったんですね。これはすごかったです。じゃあ緒方正人さん自身はなんて自己紹介するのかわかっていたら「女島の漁師です」っていうんですね。「女島の漁師の緒方正人です」って。非常に簡明な紹介でした。それで私は何といたらいいのかわかりましたね。何とか大学のというわけにいかない。それで政治社会学という学問をやっている栗原です、とそういうことにしたんです。冒頭の部分から、そういうアイデンティティ抜きでやることで、ともかくも水俣病展をやるという方向へのまとまりが出てきた。

水俣・高島展 1999年6月

山形県の有機農業の里、高島で水俣・高島展を開いたことがあります。高島は今でこそ有機農業の里で知られていますけれども、1973年に有機農業の研究會を立ち上げて少数のひとが有機農業を始めていた。それが時代の中で低農薬の農業を認める仕方でもって広がりを持ってきたんです。学生を連れて10年ほど援農合宿に通ったその高島で、水俣展をやりたい。それでそれを提案したときはずいぶんびっくりされたんですね。小さい田舎町だし、そん

なに人が来る筈がない、ということだった。高畠に住み着いた、元立教大学の学生たちがいて、そういう人たちが何故高畠で水俣展なのか、その、何故を問われた。その問いに私は答えられないんですよ。つまり反公害ということと、有機農業ということとは接点があるじゃないかっていったって、そんなことを言えばすべてに接点があるじゃないか、という。そんな無理な結び付け方をしても説得力ないよといわれて、切羽詰った。それでもう半分ばやきみたいなものですね、「水俣と高畠を結びつけるのは僕の夢なんだけどなあ」といったんですね。そのときはそれで帰ったんです、ここでは水俣展できないなあ、と思って。そうしたら若い人たちが、先生が僕の夢だって言ってた、じゃあ夢を叶えさせてあげるしかないじゃないかっていって、それでそんな思いがけない仕方で水俣展ができるようになったんです。私の夢なんだっていうの、これは本音ですよ。本音をぼろっと言ったら、正当化する次元や理屈の上ではちっとも受け付けてもらえなかったことが実現してしまった。だから出来事として何かをやるときの自分の立ち方というのを、そんなことでずいぶん考えさせられたんです。

水俣高畠展に杉本栄子さんをお呼びしました。高畠の宿から市民ホールに来ていただいたとき、タクシーを降り立った杉本栄子さんが、立派に舗装されているホールの前に立って、しばらくじっと天を仰いでいるんですね。それでいきなり私に「この下は何ですか」って問われたんです。この下は何ですか、って、指差しながら。私は、その問いの意味が分からなかった。すると私の隣に立っていた若者が言ったんです、「この下は田んぼです。美田でした」と。その若者は、浅草生まれ育ったんです。福島で勉強して、そこを卒業したときに、自分が生まれた浅草はもう路地がなくなった、路地がなくなっちゃったところに自分は帰る気がない、と思った。それで福島県から県境の峠を越えて、山形県に入った。しばらく歩いたら、「あっ、ここに路地がある」って思ったんです。それが高畠の田園風景だった。路地というのは普通都市のものです。それが田舎でここで自分は暮らしたい、ここに路地があるからって直感するわけです。それで畑仕事をしていた人に誰に相談したらいいだろうか、と聞いて、有機農業家で詩人の星寛治さんを紹介さ

れる。星さんに、高島町の町役場で働きながら農業を少しずつやっていたら、といわれて、町役場の試験を春先に受けるために民俗資料館という場所で一室に籠って勉強していたんです。そこで私たちが、彼と出会った。それで彼は町役場の職員としてまさに水俣展の一角を担ったんです。その彼が側にいて、「この下は何ですか」という問いに答えたんですね。「この下は、田んぼでした」って、付け加えて「美田でした」っていうんですね。それを聞いて私は問いの意味がわかった。杉本栄子さんが思い浮かべていたのは、水俣の海なんですね。海の風景と、高島の田舎が美しいでしょう、そういう田んぼの風景を杉本さんは重ね合わせていた。だけどその田んぼがつぶされて、近代的な舗装の立派な市民ホールの前になっているわけでしょう。そのことと美しい海が汚染されて、今でも見かけは美しいんですけどそこに毒を含んでいる、そういうことに重ね合わせているんですね。杉本さんは「やっぱりそうですか」って、言うんです。「だけど市民ホールも別な形でお役に立つんですから」と言われる。これはもう杉本さんの優しさです。私は打撃を受けっぱなしですよ。自分の感受性の問題がここでも出てくる。

水俣病患者たちのチツソとの自主交渉

水俣病患者たちの、チツソとの自主交渉を取り上げてみましょう。1971年に水俣病患者たちはチツソの東京本社に乗り込んで行ってチツソとの直接交渉を始めます。川本輝夫さんがチツソの社長とやり取りする場面が記録されています。そこで川本さんが面白いことを言い出すんですね。あんたの宗教は何ですかって、社長に聞くんです。そうすると禅宗だけど、とかいうんです。それで更にあなたの趣味は何ですかと聞くんですね。いやあ趣味なんていっても、読書くらいですと答える。そうすると、じゃあ読書ってどんな本を読むんですか、どんな本が座右の本ですか、座右の銘は何ですかって、聞くわけですね。あんたが読んでる本っていうのは、小崎さんや松崎さんの死と関係がありますかって聞く。結局川本輝夫さんは社長の名でいるその人間に興味を持っているんですね。その人の生き方にもものすごく関心を持っているんです。ところが社長と取り巻きの幹部たちから返ってくるのは「お金はいく

ら差し上げたらいいですか」という話ばかりなんです。人間への問い、生き方への問いが一方で患者から発せられて、返ってくるのはお金の話ばかりです。そのすれ違いがすごくよく記録されています。世織書房から『水俣病誌』という題で、川本輝夫さんの言葉と書いたものが一冊の大冊になって出ています。その中で、川本輝夫さんが「人間どげん生きないかんか」と言っている。人間、どう生きなくてはいいか、そういう問いがまさに発せられた。自主交渉の極めつけの問いですね。私はこれが人間の政治なんだ、と思ったんです。

政治というのは先ほど言いましたように、非常に多様です。システムの政治だけが、つまり統治だけが政治じゃないですね。こういう人間の政治というのがある、そういう確信です。最初、私は市民政治というとらえ方をしている。ただ水俣の人たちは水俣市民から足蹴にされているわけですよ。チツソをお前らつづすつもりかと。チツソあっての水俣じゃないか、それをお前たちが水俣病って言い立てることによってどれだけ水俣市民が迷惑をこうむっているか、というわけです。だから水俣市民として、水俣病者を非難し攻撃するんです。それはもう直接攻撃ですよ。無署名のハガキで攻撃する、家に火をつけられた人もいます、そういう水俣市民がいてみれば市民政治をやってるかもしれない。それは例えば安保改定に反対する形かもしれない。環境問題と取り組んでいるかもしれないそういう市民でしょう。市民のやってる政治に対して違う次元の政治があるんですね。そのことが、私が水俣病者から教わったことです。

具体的な名前を挙げれば緒方正人さんと緒方正実さん。こういう人たちから教わることが多かった。正人さんや正実さんたちと人間の政治を求めていこう、そういう言い方を彼らが納得しているわけじゃあないんだけども、ゆるい形でそういうものをつくろうよ、というその方向性みたいなものがあるんですね。

新作能「不知火」水俣奉納公演 2004年8月

石牟礼道子原作の現代能「不知火」の奉納上演が、2004年8月28日の夜、

水俣の埋立地で、薪能として行われました。チッソ水俣工場は、猛毒有機水銀を含む工場排水を、百間港から不知火海にたれ流しました。その百間港に鋼板を打ち込んで、その内側に、水俣湾のヘド口をバキュームで吸い取って埋め立てていった。コンクリートづけのヘド口と、ミンチにした魚をつめこんだドラム缶を埋めて、その上に土を盛って、芝生を植えた。木も植えられて、一見、きれいな公園のように見えます。埋立地は水俣病の原点と言える場所です。その埋立地で能「不知火」の奉納上演をしようということになったんです。その前に、何度かワークショップをやりました。能なんて全然見たこともない人が多い。その人たちに能ってなにかを説明したり、なぜ奉納上演なのかを語り合った。緒方正人さんが実行委員会の代表ですから、彼に私が話を聞くという、対話形式のワークショップをやりました。この『魂うつれ』に掲載された対談が、ワークショップの記録なんです。人間の政治を進めていく上でのある知の枠組みというか、そんなものが、これを読んでいただくとたぶん見えると思います。そこにはいくつかの論点がありますけれども、ひとつだけ絞って言います。

2001年に水俣病展を水俣でやったときにちょうど緒方正人さんの『チッソは私であった』という本が出たんです。『チッソは私であった』とはどういうことか。つまり、水俣病者は自分が被害者であると、思っている。だけどよくよく考えてみると、自分が例えばチッソの職員だったら今のチッソと同じようなことを言ったりやったりしてたのに違いない、だから私がチッソであったという可能性というのは十分にありえるわけなんです。しかも今自分は漁師であるけれども、船も、網も、みんなチッソがその原料を作っている。だからチッソの生産を自分たちも助けていた、ということに思い至る。正人さんはその時ほとんど自分が狂ったというんだけど、狂った状態の中で、チッソは私であったという認識に到達する。ふと思いついたなどというものじゃないんです。気が狂うほどの極限思考をやっている。水俣病で狂い死にした父と問答する中で、そこに行ったんです。自分は被害者ばかりなのではなくて、加害者でもある、という認識でしょう。

現場から患者自身がそういう考えにたどり着いた、それはすごく重要で、

このことは長崎でも広島でも被爆者たちが言っていることです。小田実がベ平連の活動の中でも言ったことです。被害者と加害者は背中合わせになっているこういう現在の制度。緒方正人さんがそこへ到達するんです。ブリーモ・レーヴィのいう被害と加害のグレーゾーン。裁判では被害者加害者という問題の立て方が必要です。裁判では区別を認めるけれども、被害者加害者という二分法が人間の生き方の中でそのまま通用するのか、という問題がある。裁判で勝ってお金をもらったらいいいのかということに水俣病問題が矮小化されるのはいやだと。そういう土俵から抜け出したときに彼自身はここに到達する。

だけど、それから先があるんですね。年月をかけて考え抜いてきて、このワークショップでグレーゾーンをどう突破するかということ初めて彼が言うんです。それは能の水俣奉納上演にチツソを共催者として呼ぶ、声をかけるといことです。チツソという加害者が加害者のままでいるということは、他方では水俣病者も絶えず被害者であり続ける、双方がそういうアイデンティティから免れないことになる。だけど自分は被害者だけではない。「おれは人間だよ。患者だけじゃないよ」と。もっと別の人間もいるんだよおれには、という。そうすると、別の人間を救い出すためにどうしたらいいのか。加害者というアイデンティティをはずしてもらう、ということ。そうすると同時に被害者であるということもはずれる。つまり肩を並べるといことです。肩を並べてある共通の仕事に取り組むことで双方がアイデンティティを抜け出すことができる。そのことを正人さんは、課題責任を共有すると言います。課題を達成する責任を共有する。そのことによって加害者も被害者もないと。そこに人間が現れる。加害と被害のグレーゾーンという現実を抜け出していく仕方を彼は考えたんですね。そんなことが、この『魂移れ』の対話の中に含まれています。読んでください。呼びかけと応答の中から人間の政治の解釈枠組みっていうのかな、世界を解釈し行為する解釈行為枠組みと言えるものが浮かび上がってきているように思う。

生存の政治

それは、私は3つあると思っています。

第一は、生存の政治。寝たきりの水俣病者がいます。寝たきりで転がっている。私が行くと、じーっと見ている。だけど喜怒哀楽は表すことができる。瞬きをすることができる。言葉を発することはできない。水俣病者は聞こえない声で何を言おうとしているのか。無条件に私を生きさせよ、とっている。だから、お姉さんが、結婚しても夫とともにその子をずっと面倒を見ている。それからある胎児性水俣病者を、血のつながりがない水俣病者が面倒を見ている。私を生きさせよっていう、切実な声は、生存の限界に達するまでの社会的な排除の現場から発せられる。同時に今、市民社会の中にも、生存の境界、生死の闘に近づいている人たちがうまれてきている。単純な社会的な格差じゃないですね。例えばワーキングプアー、あるいは難民化した若者たち。新自由主義の政治と地球市場化が導いたことだけれども、市民社会の外にマイノリティが排除され、市民社会の内部にも排除される人たちが出てくる。全ての人々が明日は我が身です。雨宮処凛の『生きさせろ!』という本がある(太田出版)。その最初のところに簡にして要を得たメッセージ。「生きていけるだけの金をよこせ。メシを食わせろ。人を馬鹿にした働かせ方をするな。俺は人間だ」。「生きさせろ」っていう宣言ですね。

そういう市民社会の内部の新しい貧困層と水俣病の寝たきりの人たちが、「生きさせろ」っていう、声を共有することで、つながりが出てきているんです。そこにまた一つの可能性が生まれてきています。つまり、人間の政治の枠組みの第1項は生存の政治学。市民政治と人間の政治のそのそれぞれにエッジがある。多数派の場所にも、少数派の場所にもエッジがある。そのエッジ同士が響きあうということがポイントになってくる。

共生の政治

それから第二は、共生の政治ということ。私は共生論史の集中講義をしますけれども、「共生の政治を求めて」がそのサブタイトルです。これは、緒方正人さんの言葉を引いたほうが早いんです。緒方正人さんが、水俣病を

生きてきて、誇りに思うことが三つある、といます。第一は、有機水銀で汚染されていることが分かってはなお、魚を食べ続けたこと。二番目は、胎児性水俣病患者が生まれてはなお、子どもを産み続けたこと。三番目は、チツソを殺さなかったことです。この三つです。

第一に、毒魚と分かってはなお魚を食べ続けたことってというのは、漁師が海と契約を結んでいることの証しです。「信」の関係を結んでいるんですね。だから魚を取りすぎないこととか、稚魚を取らないこととかそういうルールをしっかりと守っていくことで、海から魚をもらうんですね。そういう互いに「信」の関係にあるから、海が病んだからといって、一方的に魚を食べることをやめたってというわけにいかない。魚が病んでもその魚を食べ続ける、ということですね。

それから第二は、胎児性水俣病患者が生まれても、子を産み続けたことです。これは人を選別しないってことです。

それから第三のチツソを殺さなかったってことは、先ほどの被害と加害のグレーゾーンの突破の仕方に関係してくることだと思っただけけれども、敵とか加害者のなかにもなお、人間を見取るってことです。チツソを殺さなかったというのは大事な生き方だと思っんです。患者たちはいっぱい殺されてるんです。だけどチツソを殺さなかったってことの意味ですね。だからこれは共生ということの延長上にあるわけです。究極の他者との究極の共生ですよ、これはね。

要約して言えば、共生には第一に自然と人間との共生、第二に人間と人間との共生、第三に究極の他者との共生の三つの次元があります。

存在の現れの政治

人間の政治の解釈行為枠組みを構成する第三項は、存在の現れということ。行為から制度にわたる、人間の存在証明と言ってもよい。そのことと関連して人間の政治を成り立たせるような政治学が仮にあるとすると、それは私は、実践的な身振りの論理で言うしかないと思っています。水俣病患者たちが実際に自分の身体でやりつつあることであるし、やれることだし、それ

から、たぶんやるだろう、ということです。

実践的な身振りの論理

実践的な身振りは五つのロジックに分けることができる。第一は、顔を見る、ということ。これはもちろんレヴィナスのヴィザージュ（顔）ですけれども、顔を見る、声を聞くということです。私を死に行くままにするなという声を聴く。私を殺すな、私を生きさせよっていう声を聴く、ということですね。

だから第二は出会いということです。ただその出会いというのは、民族性とか、それから差別とか性別とかそういうものを振り落としていって初めて成り立つような出会いです。そういうのが水俣病者のその試行錯誤の中で見えてくる。

それから第三は、出会いがあったことのその先に出てくる応答行為です、応答行為は、ケアであったりアシストであったりボランティアであったりする。他方では、市場原理とその権力的な編制が一貫した系を成している、それを内破するということでしょう。システムの論理の連鎖の環節をはずすことも応答行為の内です。そういうことを実際に患者たちもやってるんですね。

それから第四は、そういう応答行為の延長上に、共生のネットワーキングを作るとということです。共同体を作るとはいわない。共同体とネットワークは対立する。それは公的な親密圏でのあり方と深く関わっていて、権力的な編制を伴う共同体を作らない。ネットワークの形での相互の助け合いがあるし、相互の交換もあるし、生きにくさを共に乗り越える、身体的な意味での参画があるわけです。だから市民活動を入れるふり幅があるんです。ノンプロフィットセクターとか、自治体とか、クラフトとか、地域の中小企業や商業、そういうものの繋がりですね、その延長上にさらに市民政治のエッジと人間政治との連携ということが実際ありうるんですね。水俣で水俣病展をやったときに、水俣の市民やチッソの職員まで参加している。

こういう共生のネットワーキングを成り立たせるのにバナキュラーな言葉が重要な役目を果たしています。母の言葉であるし、その地域の言葉ですね。

水俣で見るとよくわかります。例えば「もやい」という言葉を使います。連帯なんて絶対にいわない。もやいとは、船と船を繋ぐこと、人と人を繋ぐこと。お寺と一緒にいこうっていうときに「お寺にもようていこうもんな」っていいます。もやうという動詞を使います。日常語です。市民と漁民とのもやいと言う。それから、ほかの地域でもし使っていたら教えてもらいたんですが、「のさり」という言葉があるんです。「のさり」とひらがなで書くんです。天の賜物、贈り物っていう意味なんです。贈物っていうといいもの、と、普通思うんですけど、不幸とか災厄までも、贈物、のさり、と言います。台風はのさりっていうんです。台風は、屋根瓦を吹き飛ばしたり、木を倒したりする。とんでもない災厄をもたらすでしょう。台風はしかし同時に魚群を引き連れてくる。だから屋根瓦が飛んでも、船を出せっていうんです。そういう両面性を含んでいる言葉ですね。

第五に、共生のネットワークあるいは公的な親密圏を踏まえた形で、公的な親密圏のネットワークのネットワーク。ネットワークのネットワークという次元が出てくる。それは多層的な公共圏の構築ということにも繋がります。そういう現実が実際水俣で起こっている。例えば、最大級の産業廃棄物最終処分場を水俣の山奥の水源地に作ろうという話が進行しています。それに反対する人たちがたくさん出てきた。水俣病患者だけではないんです。むしろ水俣市民が立ち上がったんですね。自分たちは水俣病者に対して申し訳なかったと、そういうことが初めて言われるようになった。市長選では力を合わせて廃棄処分場建設に反対する人を市長に選んでしまった。水俣市民が音頭とりをしながら、まさに多層的な市民たちが議論を重ねながら、産業廃棄物処分場の建設に反対する活動に立ち上がっている。

普通、公共圏というと、公論の場を指します。だけど水俣を見てるとそうじゃないですね。最終処分場を作ることで市が財政的に潤うじゃないか、それは公益ではないのか、という賛成派の主張がある。そういう発言に対して、反対派はもうひとつの公益ということをいうんです。もうひとつの公益。水源地にそんなものを作ったら、水が汚染される。それから一日に150台のダンプが、水俣市を砂塵を巻き上げて、処分場に向かうわけでしょう、そうす

ると低農薬で作っている甘夏とかお茶などがもう売れなくなる。産業廃棄物処分場ができることでいくつもの困ることが出てくる。水俣という命に満ち満ちた場所を保全するということは、もうひとつの公益じゃないのかという問題の立て方をする。それから処分場反対っていった時にじゃあ別のところに作るのならいいのかという意地悪な問いが返ってくる。それに対する答えもまたあるんです。

水俣では実際、自分たちのゴミを自分たちで処理できる、施設を持っているんです。ゴミの分別っていうことでいえば、これは日本でも最高の水準に達するくらいのことをやってるんですよ。水俣病を起こした水俣の環境としてそういう方法論をしっかりと行政も作ってきた。公共圏を構成するものとして、公論、公益と共にもう一つ、公的な決定ということがあります。公論の次元でいろんな意見を述べ合うとしても、結局行政が企業と結託して、ある決定をしてしまうということがあるわけでしょう。それっておかしいのではないか。市民自身が決定に関わるができないのはおかしい。ちょうどその時に市長選挙があった。それで処分場建設に反対する人を、市長に選んじやった。今まで市長だった人は水俣が疲弊しているから産業を活性化すると。そのために処分場を呼び入れていくっていう考え方だったんです。一応処分場問題は中立といってるんですが、そういう処分場容認派と反対派が市長選に立ったんですね。そしたらみごとに反対派の人が圧倒的な形で、市長に選ばれた。だから市民が市長ぐるみで県に、処分場建設を認めるな、っていうことをいってるわけです。公論の次元でも、いくつもの集会を開いたり、市役所の場を借りて、賛成派と反対派が話し合うこともやってるんです。非常に多層的な仕方でも、公論の次元でも、積極的な参加が見られる。言葉だけじゃないでしょう。身体を張る人も出てくる。その処分場の予定地に行って、座り込みをするといったことをやったんですよ。そういうこともひとつの言葉です。きわめて身体性を孕んでいる公論になるんです。

そういう、公益と公論と公的決定、この3つを含んでいる、公共圏ですね。従来の公共圏論のメディアに偏っている、公論に偏っている公共圏と一味違う新しい公共圏が出てきますね。人間の政治という視座をしっかりと保ってい

ると別の公共圏が出てくるんだ、ということだと思いますね。

(天田) 栗原先生、どうもありがとうございました。それでは、もう始まって2時間半経っていますので、一回休憩を10分とりたいと思います。45分に再開にしたいと思います。それでは一回休憩にしたいと思います。

質疑応答

(天田)では、再開したいと思います。残り約1時間ですので、まず立岩さんと私の方から、ごくごく簡単にいくつかのことについて質問やコメントをさせていただいて、その後、フロアーのから積極的に質問やコメントをし、その上で、栗原先生に応答していただければと思っています。栗原先生からも積極的に院生や参加者の方々から発言をいただきたいという希望をお聞きしていますので、できる限り議論・討論の時間にあてたいと思っています。できる限りそのように時間を使いたいと思いますので、では早速ということで。

コメントと質問・1

(立岩)立岩です。栗原先生どうもありがとうございました。これから僕がすこし話して、そして天田さんに回して、そして栗原先生にそんなものをもろもろ受けていただいて、っていう順序でっていう、さっき天田さんが紹介してくれたとおりです。

何から話すかですが、一番目は、継ぐものがあるということ。前から思っていたことでもあるんだけど、やっぱり、日本の、とくに戦後の、と言わないといけないわけではないんだけど、戦後でいいです、そういった時代に何が起こったり考えられてきたのかを、知る、そして考えを足していく、という仕事の有用性といいますが、必要性を、あらためて思った。

僕自身は、戦後、いわゆる「体制」に対してアンチであった、カウンターであった部分に対して、むしろ懐疑的・批判的っていうんですが、相当の距離感がある部分もあるんですが、ただそれは少なくとも捨て置いてよいようなものではないとは思ってきました。では、それを例えば学問なら学問というものの中で、どれほど捉えるってことがなされてきたのか。それほどではないんじゃないかと思っています。

ただ、確かに、それは考えてみると難しい。あらためてその難しさを栗原先生のお話を伺っても思います。例えば生命倫理学なら生命倫理学ってものが、数十年の学問的な蓄積っていうものを持ち、その文法に適った言葉を発

し、それなりの体系性をもって引き継がれている、ある意味で発展してくる。そういったものを引き継ぐ、解析するってことは実はさほど難しいことではない。それに比して、それに対して、日本の戦後にわれわれが汲み取るべきものってというのは、いわゆるアカデミズムの中に存在したものではない、むしろそこからある場面では積極的に、退(の)いたというか、外れたところに存在していて、しかもそこにあるのはその、なにか体系だった言葉ではなかったりする。時には言葉でさえもない、というようなものである。

そうすると、それをあらためて言葉として、考えを継いでいくっていくことが難しいんだけど、しかしそこにはやっぱり何かがあって、だから継いでいくことの困難さと同時に、その必要性っていうんですか、あるいは重要性っていうんですか、そういうものをあらためて思ったっていうことです。これが一つです。

で、これはやっぱり難しいんだと思います。ただ、難しい難しいといっても仕方がないですから、COE っていうこともあるし、それがなくても、何かっていうとその、みなさんが歴史的な文脈を持っている事象について研究をする、そういった時に、とりあえず年表を作れてひとつ覚えのように僕は言っているわけだけでも、それが作れたからといって何が出てくるかどうか、それは本当は分かりません。本当は分からないんだけど、そういった仕事さえもなされていない以上は、まずはそういったところをやってみる、そういったことをずっと続けていくと何か、言えることっていうのがやっぱりあるんだと、あるはずだっていうことをですね、あらためて思った、ということなんです。

やれるとこしか、とこからしか、われわれはできなくて、それは私にとっても同様なことです。ただ、次に一つ、明らかに言えることは、その日本の戦後から何を引き出すかっていう時に、おそらく、引き出すに値するものは、生命っていったらいいか命っていったらいいか、なんといったらいいか分かりませんが、そういったことを巡ることごとだと思います。もちろん社会運動、社会思想さまざまなものがあって、それなりにさまざまなことが語られてきたわけだけでも、その日本の戦後の中から、継いで何かを

考えるべき、そこに値するものがあるとすればそれは第一にはそういった、命とっていいか、生命とっていいか、なんていったらいいか分かりませんけれどもそういった領域なんではないか、ことをあらためて思った、ということです。

で、とりあえず具体的にやれるところからやるしかない、とりあえず、僕もその端っこに加われればいいなあと考えていて、これは少し宣伝させていただくと、1973年に出た本ですけれども、横塚晃一っていう人の『母よ殺すな』という本があります。長らく絶版だったんですけれども、あと数日で再版されることになりました(生活書院・刊)。例えば30何年前、ここになにがしかのことが語られてる。これは学者の書きものではない。横塚さんって人は小学校も途中で終わったんじゃないかな、そういう人の、でも、言葉になって、文章になってるわけです。そういったことをまずは思う。それを皆さんにも呼びかけたい。そのことに尽きるといえば尽きます。

さて、二番目、では、どのようにここに堆積しているもの、身体・生命を巡って堆積しているものを、継いでいかなんですが、しばらく、エピソードのごときものを並べてから、と思います。そして私の場合には、ある意味、わざとというか、そこを迂回して仕事をしてきた、しようとしてきたという話をしようと思います。

先生に比して、貧困なというか短いというか、過去の時間が私にもあるにはあります。先生がリアルタイムで読まれた、『苦海浄土』っていう石牟礼道子の著作、これは今調べると1969年が初版です。僕はその当時田舎の小学校の2年生で、ほとんど何も、『苦海浄土』ってものも知りませんでした。ただ妙に鮮明に、70年前後、蕙旗立てて、水俣の人たちが東京に登ってくるという画像、映像は、何かしらの、原風景のようなもの、というか何かしらのものを私に残っていて、それが結局今こんなことをしていることの何かには関わっているのかもしれない。ただ、水俣についてとくに何かを読むといったことはなかったと思います。

大学に入って、見田宗介さん、真木悠介という名前もおもちですが、彼のゼミで、僕は大学に入ったのは1979年ですから、出てからもう10年経った

後なんですけれども、『苦海浄土』を読んで、これは何と言ったらいいんでしょう、「おお」という感じが、その「おお」が何なんだかよくわかんないんですけれども、あった。

そして、今でも大本について何か知っているわけではないんだけど、先生のお話を聞きながら思い起こしてみると、高橋和巳の『邪宗門』は読んでいたりする。さっきウェブサイトで見たら、これ出たの意外と早くって1965年に出た本なんです。それは具体的に存在したいいわゆる新興宗教の話じゃないですけども、その小説に書かれている世界のある種の凄みっていうんですか、何ていったらいいの。ある力を有するものが別の力を有するものに滅ぼされていく。また、例えば大江健三郎の小説であれば、これもさっき調べただけですけど、『万延元年のフットボール』が1967年です。それから『洪水はわが魂に及び』は1973年ですね。『洪水は...』は大学受験の頃読んだ記憶があります。その頃は社会科学の本なんてこの世にあるのも知らず、小説しか読んだことがなかった。

僕はこれらの物語の下敷きになっているような、あるいはそこで想起されているようなことごとについて知っていたわけじゃないんですけども、そういったものにあるある種の重さっていうものを感じたは感じた。ただそれを受け取って、それに言葉を継ぐという継ぎ方ってものは、私の場合さしあたって思いつかなかった。悲壮なものにならざるをえない少数者の抵抗というものにはなにか感じいってしまうところがあるし、その後、それよりはるかに規模の小さいしょぼとした運動におけるちょっとした悲哀のようなものは実際に感じたりもしましたが、そのこと自体をどうこう言っても仕方がない。それはそれとして何かしら僕のベースっていうか、背景にはありはするんだらうけれども、それを懐旧しても仕方がなからうと。

次に、この時代にあって悲壮であったりするもの、それと時には接しながらまたちょっと違うもので、60年代の終わりから70年代にかけての、世界でさまざまに起こった反体制的な文化っていいですか、そういったものは学問であるとかなんとかっていうこと以前にですね、これはやっぱりどんなに田舎の小学生中学生をやっているもそれなりに感じることはできたわけで、

それはやっぱり何か根っここのほうにあるんだろう、と思う。でそこで言われたこと、言われたのでないとしても全体として醸し出された、気持ちっていうか、気分というかですね、そんなものもある。

大学入って、3年で社会学科に進学して、そこにさきの先生の話の中に出てきた高橋徹先生という方がおられて、私が大学院にいた途中までおられた。なにか教わったっていうわけではないんだけど、彼は栗原先生からさらに10くらい上の方で、実は数年前にこの京都の病院で亡くなられたんですけども、ときどきジェファーソン・エアプレンがどうとか、そういう話をされて。ああそうか知ってた、みたいなことを思ったことがあります。ただ私自身は、重いものよりは少し軽い感じの対抗文化的なものに関していえば、はいそれはそれでOK、そのとおり、って感じでした。それは言葉としてわざわざ何も言うことはない。音楽をやる人はやればいいんだし、聞けばいいんだしっていう。

として、僕はその続きをどういうふうにつけてようか、と思ったわけです。その時、まず、一つには外延・外縁がはっきりするって言ったらいいいのかな、問いにかかる対象として、わりとかちっとしたもの、であれば取りかかれるかもしれない。気分は気分としてありつつ、なにか社会に向かっていくっていうか、返していくっていうことがそういうやり方だったらわりと安直にできるんじゃないかと、思ったんだと思うんですね。

例えばわれわれの社会における所有についてのきまりっていうのは、これはかちっとしたルールとして、規範としてあるいは法として存在する。それを吟味していく、というような仕事は、僕にでもできるだろうと、そんなことですね。

それは時代に関わらせていえば、その時代の持っていたものっていうのは、ある種この社会を組み替えるっていう、営みであり、試みでありだったと思うんです。そしてそれはどこかで失敗したことになるって、事実そうであったのかもしれない。例えば栗原先生たちの世代と私の間にいる人たち、いわゆる団塊の世代の人たちが、あるいはその人たちも、そういったことを試みようとした。そして何がしかのことを言った、そして失敗したって話にな

って、そのままになっちゃった。それは何かしら残念なような気がしてですね。そしてそのある人たちが、身体とか、地域とかに戻っていったとしたら、それは、すこし待ってくれと。まずは今の社会のことを普通に考えてみよう

と。
そういう意味で僕は団塊の人たちに対して両価的な感情を持っているわけで、せっかくいいことを言ってくれたんだったら、もっとちゃんと考えていてくれればよかったのに、みたいなところがあって。上の団塊の連中がなんか疲れてひしょげてる、こちらは疲れる後あるいは前のところにいる、自分たちが何か考えてもいいだろう、そんなことを思って私は考えてきたんだろうなっていう感じがあらためてします。それで、仕事をちまちまちまちま続けている。そのちまちまちまちましたって感じってものが、それが僕なりの引継ぎ方なんだろうとは思っています。

ただ、けれども、というのが三番目のお話です。ここで最初の話に戻るんだけど、生命とか命とかっていうこと、あるいはそれを巡る現代史をどう見るのかに関わって、なにをもとに、なんのために闘われたのか、それを歴史の中に確認することは必要なだろうと。

実は今日、僕は間に合えば、一つ長い文章を書いて終わって持ってこようと思っていたんです。それは今年中にうまいこと行けば、うまいこと行かせるつもりですけども、うまく行かなくとも出すつもりですけども、ちくま書房から、いわゆる尊厳死に関する本を出そうと思っていて、『思想』に3回書いたものと「良い死」というタイトルで筑摩書房のウェブに連載したものが、このままじゃ使えないということで、今書き直しているんです（発行は2008年になった）。そこに「自然な死」という章があって、自然な死っていうことを巡ってわれわれはどんなことが言えるのか、それを書こうと思っています。できれば持ってこようと思ったんだけど結局、間に合わなかった。

何が言いたいのか、何が気になっているかということ、同じ言葉が別に使われるようになっていはいはしないかということなんです。

例えば60年代から70年代にかけて、水俣病をめぐる出来事が起こって、

他にも起こった反公害と言ったらいいのが、そういった動きの中で、自然っていうものがそれに対抗する言葉として存在し、ある種のスローガンとして存在した。そしてそのしばらく後に、自然な死っていうものが、浮かび上がってくるっていうか、せり出してくる。そういう出来事が起こってくる。そしてそれは確かにある連続性ってものはある。例えば科学技術文明に対するある種の拒否感というか対抗感と自然な死という言葉にはつながるものがある。そういった意味で言えば、普通に考えれば、明らかになっていうか、そこに連続性がある。

しかしながらどこかでずれてしまったというか、別のものになってしまったっていう直感のようなものが、まずはあるんですね。それはその場合なんであったんだろうということですよ。例えば現代史、病や命やそういったことを巡る現代史ということを考えるということは、その間に何が起こったんだろうか、そういうことを辿り直して考える、ということであるのかなあ、と思ったのです。

答は簡単な答なのかもしれない、一つの答え方としては、それは先生がおっしゃった「私を生きさせよ」っていう。そういった主張がそうでないものになる。いってみれば「私を死なせよ」というところに、なにやら落ち着いてしまったっていうことがある。ある意味で違いは明白なんですけれども、しかしその明白な違いとある種の連続性みたいなものを、どういうふうに解きほぐして考えていくか、そんなことが一つ、大切なことなんだなあと思ったのです。

さて、以上に関わって幾つかをお訊ねすることは可能であったはずなのに、手前勝手にしゃべってしまったのですが、二つ目、三つ目に述べたことを、質問の形にすればですね、一つは社会の形のことで。

先生が、一方では、市民社会、シビル・ソサイエティがたくさんの可能性を有している、それを肯定的であらしめようとする、そういったモチベーションといいますか方向といったものを持たれていくということと、他方で、先ほど水俣展を巡るごく数年前のことを先生語られたわけですがけれども、そこの中でのその市民社会と称されるものに対するある種の、絶望とまでは言

わないにしても、肯定できない感覚みたいなものが、どういうふうにも、両方が並立して、おそらく同じところから立ち現れてくるものなんだろうけれども、それはいったいなんだろうかと、いったことをお訊ねしたいと思います。

市民、でひっかかるのは、自然が破壊されているから自然を守ろうといった時の、あるいは病にどのように対するかといった時の、なにか調子のよさとか、清潔さとか、そんなものであるようにも思います。とすると、さきほどの私の話では三番目に関わっていて、そのことについて、ただそんな感じがするというのではなく、どのように言っていくのかということになるのかなと。そしてそのことは、人々の能動性、人々の活動の能動性を肯定することとまったく背反することではないのではないかと。そんなことをお訊ねしてもよかったのかもしれませんが、しかし、その答はさきほどのお話の中にすでに語られたような気がします。

そしてもう一つ、これは今の話とはいくらから別の文脈のことなんですけど、僕はたぶん社会学っていうのをいちおうやっているにもかかわらず、どこかでその時その時に起こっていることにそんなに付き合っただけでなかったところがあります。とくに、若者っていうのかな、青年っていうたらいいんですけどね、そういったものに僕はなんていうか誠実に向き合っただけでなかった。

あるいはむしろ自覚的にそうなったのかもしれない。それは一つにはわれわれの同年代の研究者の中に若者を論じることで、飯を食ってるかどうかわかりませんが、そういう輩といいますが、たくさんいて、中には優れたものもあり、中にはそうたいしたものでもない論もあったんです。そういうのが花盛りでずっとやっているから、ほかのことを俺はやろうという。ただもう一つ、単純に若い者には興味がないって感じもあったように思います。ただそれはたぶん語り方に対してのことであったのかもしれない。新しい新しいと言われるのだけれども、そう新しい人たちには思えないという。けれども、それよりずっと上の年代でもある先生は、ずっと青年とか若者と、誠実に向かい合っただけでなかったということがある。

それというのは、その差というのは、僕と比較して何か出てくるとは思いませんけれども、なにか、どういうことなんだろうかと、素朴に聞きたいか

などということも、思っています。これは今日お話を聞く以前からちょっと考えていたことなんですけれども。

このくらいにしておきます。とにかく、ある程度までは今、僕がこの大学院で皆さんに言っているように、とにかく事実を集めて来いと、何も知らないじゃないかあなたたち、本当に知らないですね、あきれるほどですね。だからとにかく調べて来いと、当座はそれで行けると思います、ただ、その後の作業が難しいだろうと。だけど、その前の時間を、そうやって時間をつぶす、ものを集めて調べることに費やす、そこの中から何かは出てくるでしょう。何かがあることは確実だと思うんです。ですからその後はわれわれの努力というか、そこから何を考えていっていかってということになります。そんなことを、お話を伺いながら思ったということで、私からはそのくらいにしておきます。以上です。

コメントと質問・2

(天田) ありがとうございます。続けて私から極めて簡単なコメントさせていただき、それからフロアーの方々から様々な質問やコメントをいただければと思っています。

栗原先生、非常に詳細にお話していただき、まことにありがとうございました。また、この場を借りて先生に深くお詫び申し上げなければならないのですが、実はこの企画を先生にお願いしたのはつい一週間くらい前でして、唐突のお願いを直前にいたしましたことを深くお詫び申し上げます。ただ、こちらが突然お願いをしたにもかかわらず、きわめて限られた厳しい時間的制約の中で、先生にはたくさんの資料を用意していただき、非常に丁寧にお話していただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

それと、私の方からも栗原先生のご退職記念のご本に寄せた原稿を配布しています。実は、私、9月末にハードディスクを大破してしましまして、最終版の原稿ファイルを消失してしまったため、配布しているのは「草稿」になります。どの程度、参考になるかはわかりませんが、事前に読んでおいたほうがよいこともあるだろうと思って「草稿版」をウェブ上にアップ

して皆さんに配布してあります。この原稿では栗原先生の書かれた文章を比較的たくさん参照させていただきながら もともとこの4倍ぐらいあった引用部分を大幅に削除してこの分量になっています。栗原先生の思考されてきたことのごく一部を、そのエッセンスを書いてみたつもりです。先生が思考されてきたその先をいかに考えるかについてまで書くことは全くできておりませんが、一応参考資料として配布しています。一応この点もお伝えしておきます。

さて、私自身は、石牟礼道子さんの1969年刊行の『苦海浄土』が文庫版として出版された1972年、あるいは誰もが知っているところでは浅間山荘事件があった年に生まれていますので、いわばその時代についてリアルタイムで全く知らないわけです。ただ、小学校・中学校という時期に親世代から私はいわゆる「団塊ジュニア」の世代ですが、私の父は1939年生まれでどちらかといえば栗原先生の世代に入ることだって 諸々について何となく聞き、そして栗原先生たち世代が考えてこられてきたことを受けとてきました。

そうした時代であったのだと思うのです。その中で60年安保の話やその後の話なんかを押し付けがましい人たちから聞き、多少は共感しつつもなかばウンザリしてきたというのが幼いころの経験としてあります。程度の差こそあれど、おそらくそのような世代になります。

そして、その後、大学に入って、栗原先生の世代の人たちから、そして団塊世代の人たちやその次の世代の人たちから私が何をいかに受け取ったのか / 何をいかに受け取るべきなのかということを常に考えてきたように思います。更に付け加えれば、大学院生になってからは立岩さんたちの1960年前後の世代の仕事から実に多くのことを学び、そして受け取ってきました。だからこそ、思うのです。私たちは、それぞれの時代的・歴史的な文脈においてその時代を生きてきた人たちが何をいかに思考してきたのかをまずはきちんと知り、その上で、「その先」を考えることが大切であると。

以上のような点を踏まえて栗原先生にまずお聞きしたいのは おそらくは詳細にお聞きしなければならないことなのでしょうが、ここではざっくり

と質問をいたします、先生は時代的・歴史的文脈の中で立ち現れてくる出来事を通してさまざまに思考されてきたのだと思いますが、現実的には、まさに私たちの現実はそうであるがゆえに厄介なのですが 様々な困難があると思うのです。だからこそ、それぞれの人たちに厄介でありながら、その厄介さはバラバラであり、更にはその中で苦悩・葛藤するわけです。これは当たり前の話ですが、とは言っても、私たちはこうした現実の困難性を引き受けていきていかなければならないわけです。先生にまずはこの点をお聞きできればと思います。

例えば、水俣に限定したとしても、私は1年半前まで熊本に住んでいましたし、先ほどお名前が出た原田正純先生と同じ熊本学園大学という大学で働いていたこともあり、私自身は全く門外漢ではありますが、それでも諸々の困難な現実を伝え聞くわけです。とりわけ水俣について考えあぐねている大学生や大学院生から話を聞く機会もありました。

そこでは、水俣病をめぐる様々な困難や苦悩や葛藤があり、大学院生たちでそのようなテーマについて考えている人たちもいました。多くの場合、諸々の親族・知人間のいざこざを含めて様々な関係上の齟齬や軋轢や対立があり、また裁判などをめぐって当事者や支援者にも諸々のコンフリクトがありました。そして水俣市民の中にはそうしたコンフリクトに嫌気を感じたり、場合によっては回避したりするような現実を聞くこともありました。具体的には水俣市民などから起こった「水俣病」という名称を変更しようとする運動が起こってきた時代、また裁判を含めて様々な出来事が出来ていた時代に、多くの研究者もそこに関わっていた。そしてそれらをめぐる現実の厄介さについても知っていたわけです。このような困難や厄介さは、生存をめぐる現実 に常に随伴する困難と厄介さですが、そうした社会学的に重要な現実の現実性をどのように考えてきたのかという問題があります。

そうすると、本日、栗原先生のご指摘された第2点目に関わる問題だと思うのですが、「多様な政治を学ぶ」という場合、現実には惹起している困難な出来事があり、まずはそのような現実の困難性を先生はどのように位置づけながら、ある種、水俣 の肯定性を提示されたのか とりわけ、「これは

私である」という根源的な自己と他者の関係のありようを提示されたのか。特に、上記のような関係のありようを私自身も引き受けてそのように考えているところはあるにしても、事実として、現実にはそのようにはなっておらず、また私たちの社会はそのように回らないからこそ立場や状況が異なれば、その引き受けてしまう困難が異なり、そこに軋轢や対立や分裂を招来してしまうという仕組みがあると思うのです。この点について先生がどのように時代の中で考えられてきたのかについて率直におうかがいできればと思っています。これが第一点目になります。

ちなみに、このようなそれぞれの時代において歴史的に何がいかに起こってきたのかについて調べるといふまさに研究者を含め様々な人たちがやるべき仕事は山ほど残っていて、そのように事実をさしあたり淡々と、そして緻密かつ詳細に記述することはそれ自体で大切な仕事だとわれわれは思っているところです。

第二点目は、先生に以前からお聞きしたいと思っていた点でもあるのですが、「大本」や「やさしさをめぐる青年たち」、あるいは「コミュニン」、更には「ボランティア」や「市民活動」、そして「高島」や「水俣」というようにそれぞれの時代において先生が考えてきたテーマがありますが、もちろん、それは常に連続して一貫して考えられてきたことであり、時代によってテーマが単純に変化してきたとは思っていませんが、いずれにしても上記のようなテーマを考えていく中で、先生の中で、どのあたりが先生の個人的あるいは理論的関心から連続しており、あるいは逆に、それらの個別の困難と厄介さを考えれば考えるほど、ある種、それらの現実がうまく論理的に順接させて考えることができず、隔たりとして感受されたのか、という点は率直に気になったことであります。先生が考えてきた現実の中での「連続」と「非連続」、「順接」と「逆接」、「接合」と「隔たり」についてお聞きできれば幸いです。

第三点目は、上記とも重複しますが、たとえば「市民社会」だとすれば、それらの何をいかに肯定し、否定するか、という大きな問題についてです。現実の何を肯定し、何を否定するのかという按配というか、その論理的接合

が気になるわけです。そのようなことを先生がどのようにお考えになったのかは非常に興味深い点でありますし、それぞれの時代の中で あるいは今から振り返ってみて いかにかに思考されてきたのかという点について率直にお聞きしたいと思うのです。これが三点目になります。

社会学的に考えてみると、それぞれの時代の中において何かを肯定するという作業はその実、極めて難しいことであるように思うのです。現実において腹立たしいこと、あるいはその現実の息苦しさについて 否定 することは 何をいかに 否定 するのかという途轍もなく重要な問題はあるにせよ 比較的容易のように思いますが、何をどのように 肯定 するのかというのは現実の困難を知っていれば知っているほど、あるいはその 肯定 が別の 否定 に接合してしまうことを知悉していればいるほど、実は極めて難しいと思うのです。むしろ、第一点目で指摘したように、現実にはそう単純ではない困難かつ厄介な問題が山積している場合、その時に 肯定 する作業は 誰でも分かるように難しいのですが、そうでなくとも、肯定 の立ち位置それ自体が難しいと思うのです。そのような 肯定 の立ち位置に関わる社会学的困難を先生はどのようにお考えになってこられたのかなという点についてお聞きできれば幸いです。

最後は、本当に雑感となりますが、実際に他者の 声 を聴き、他者と 出会い、そして他者の「呼びかけ」に 応答 する中で、ネットワークが紡ぎだされていく、それ自体の契機というものがあると私自身も考えておりますし 水俣の言葉でいえば「のさり」という、ある種の「贈与」にも関わることでありますし、もっといえば「根源的な贈与」というようなより根底的な問題に関わることであります、 「人間の政治をとらえていく」それ自体は大切な「問い」であると思うのですが、ただそれを受けた上で、私たちが何をいかに考えるかということもあるのだと思うのです。たとえば、「水俣」にせよ「コミュニン」にせよ「青年」にせよ、その人たちは、現在、すでに年齢を重ねて老いを生きており、その中で自らの実践を現実の中でどのように考え、いかに動いてきたのか、更にはそのような現実の中で社会科学が何を語ってきたのか、このような仕事を私たちは引き継いで考えるべき

であろうと思ったところです。

だいぶ時間が超過してきていますので、このあたりで私の質問とコメントは終わりにさせていただきます。私たちが先生たち世代の仕事を引き受けた上で、その先をいかに考えるべきであるのかについての私なりの拙いコメントを述べさせていただきます。

さて、残り 30 分ありませんので、院生の方々からも積極的にコメントあるいは質問等をしていただければと思います。いいでしょうか。せっかくのこういう機会です。

コメントと質問・3

(院生 A) 授業でいろいろお話をうかがって、今日はまた水俣についてはうかがったんですが、どうも僕はそれを聞いていてですね、それはどうなんだろうという点がどうしても気になりました。緒方さんがチッソに行かれた。フォーラムでしたかね、会社としてそれに協賛くれと。そうすると、そこにこられた部長さんは、会社としては協賛できないが個人としては協賛したいといったというふうなくだりがあったと思います。

私は難病の運動に参加していますけれども、そこにスモンの女性患者がいらして、ずっと車いす生活をなさっている。それで、その方にお会いすると、「あの薬さえ飲まなかったら」「売っていなかったら」ということを、いまだに示唆されるわけです。それで、その女性が、今、生存してきて心晴れる日はどういう日だろうか、と思ったときに、その会社がその女性に「すまなかったなあ、これからはそういうことはないように、われわれもあなた方と一緒にがんばっていきたいよ」というようなことが出てくれば、かなり違うと思ったのが頭にありました。だから、緒方さんのその時に、感じられた思いが、私は緒方さんであれば、会社としてその水俣のことを謝して、そして会社として一緒にそのフォーラムを成功させていこうというような形になりえないのかな、というような思いでうかがいました。別に質問ではないんですけれども、感想を申し上げました。

(天田)いかがでしょうか。栗原先生には、後でまとめてかなり雑多な質問とコメントへ応答していただく予定ですので、他の方はいかがでしょうか。

(院生B) 栗原先生のお話を伺って、すごくインパクトに残ったことは、この写真を説明される中で、栗原先生が先ほど「この写真に自分を見た」とおっしゃっていました。僕は自己同一性というのはたいてい、自分の中でまとめられているものだと思っていたのですが、自分の外にあるものに向かって、「ああ、それは自分と同じ立場にいる」「自分と同じものだと思える」ということがあるんだなということで、ひとつ驚きました。それが、この写真自体がそうではないとはしても、栗原先生の最初の話で良寛の本などがあって、原点がそこにあるということをおっしゃって、僕にそのことを照らし合わせてみるとまだ僕はなんか、確かに、自分はどうやって生きてきたのかなっていうことを振り返ることはできるけど、自分の原点がどこにあるのかってことというのはまだうまく説明できないところがあって、これから何年生きるかわからないし、何年勉強するのかってこともよくわかりませんが、勉強していく中で自分の原点っていうのが、ここにある、っていうことを話せるようになっていくと、いい研究者になれるかな、と思いました。

以上が巻頭にあたることなんですけれども、もうひとつは、Aさんが今おっしゃったことに結構近いところがありまして、私は学問的な研究活動としては企業倫理学というものをやってきまして、企業の社会的責任っていうものを、それがそもそもあるのかとか、それをどうとらえるのか、などについて非常に興味を持って勉強しています。その中で栗原先生の話の中で課題責任を共有するっていう、実際には緒方さんという方がお話されたところだと思うのですが、企業の、基本的に加害者と思われている人と被害者と思われている人が同じ席で対話したり、あるいは何かひとつの課題に向かって取り組みをするということが、どれだけ可能なかというところが、僕には非常に疑問に思えるところがあるんですね。

というのも、例えば、実際に行われているフォーラムでお金がないからお金を貸してもらえ、お金を企業から持ってくるっていうことは確かに可能、

物理的には可能だと思うんですけども、実際にそれが企業の、一企業の側からすると責任をとったことになるのだろうか、というのはずっと思っているところがあるんですね。というか、あまりよくはわからないんですね。あまりうまくは説明できないのですが、いってみたらお金を払って済ませられる責任、ということがあるかとは思うんですけども、それ以外の部分で企業はどういう責任を果たすことができるのかということをお私はずっと興味を持っています。それはちょっと文脈は違っても知れないけど、栗原先生が別のところでおっしゃった、その裁判の賠償責任からどういう枠組みで抜け出せるのかっていうところとも非常に関連があるのかなと思ってうかがっていました。この点に関してひとつ質問したいと思います。企業の課題というふうなことでお願いします。以上です。

(天田) ありがとうございます。

(院生C) 栗原先生ありがとうございます。私は、緒方さんのお話の中で「毒の魚を食べ続けている」という話をおっしゃっていたこと、もうひとつは、水俣の言葉で「のさり」という言葉があり、「こういう毒に冒された魚でもやはりのさりである」とおっしゃっていたことに、ある種びっくりしたというか、それをまた食べ続けているということにびっくりしたのですけれども、その上で、共生ってことを考えてみたときに、そういう災厄とか、そういうものも贈り物としてとらえる、という、そういうものに、それが共生なんだよって言われたときに私も含めてちょっと戦慄を覚えてしまうというか、そういう人が多いと思うんですね。それで、天田先生がおっしゃっていた水俣の名前が水俣病に使われるということでそのイメージもあると、でも水俣の人たちはチッソという会社によってお金をもらっているという、そこに加害者と被害者というのが本当に交錯しているような状態になっていて、でそういったところ、それでも、その共生ということを考えるときに、それを「のさり」として受け入れていくっていう、そこをこう乗り越えていくっていうのはいったいどういうふうにしたら可能なのかなということについて

て、先生はどういうふうにお考えでしょうか。この点についてお聞きしたいなと思いました。

(天田) ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

(院生D) お話を感激してお聞きしたのですが、栗原さんのお話を聞いて、出来事をどのように位置づけるのか、その自分の立ち位置みたいなものが決まるというか、変わるというか、その点も含めて興味深くお聞きしました。雨宮処凛の『生きさせろ!』ってということが自分のなかでもこうもやもやした気持ちがあって、それは何だろうって考えていたこともあったので、それが出てきた、たしかそういうことがあったと思うんですけど、栗原さん自身が確かさっきのお話だとコロンビア大学に留学中に、参加観察っていうか、参加と観察のデモに参加して、栗原さんがデモに参加して、先生のほうが路傍で「がんばれ」って言っているという話がありました。それで、その後、栗原さんが帰ってきてからも、やっぱり、こうデモに参加するあり方に上記とは違うっていう感じがあったのかどうかという点が気になりました。もう一つには、一つ目に関わることであるのですが、ボランティア学会などについても語られてきていると思うのですが、それは、入るときと出るときにけじめをつけて出て行くのか、それとも関係を保ちつつ、大本教との関わりみたいに並列して関わっていくのかなということが気になりました。一点目は、出来事との距離感という点と絡めてお話いただければと思います。ちょっとうまくいえないんですけども。

(天田) ありがとうございます。他にどうでしょうか。そうしましたら、たくさん質問やコメントがあって先生には大変申し訳ないのですが、先生、よろしく願いいたします。

栗原先生からのレスポンス

(栗原) たくさんの質問とコメントをいただいたわけですけども、市民社

会についての私の立ち方は、あるふり幅を持って動いているものなんです。観念の上で市民社会が自分の中に入って来た限りでいえば、そしてまた自分が生きている、その地平で言えば、市民社会というのは肯定されるべきものだし、これはとりわけ東欧革命との関係で市民社会への回帰ってということが、言われるところと言えば、それが肯定的にやはり自分の中であらえられている、というのは確かですね。だけど当時、例えば東欧ベースの市民社会が作られると同時に大きな民族的な排除を含むということも明らかにされてしまうわけです。それはまた外国でそうであるばかりじゃなくて、日本でもやはりそうですね。だから市民社会というのは肯定すべきものか、否定すべきものかという、そういう見方で割り切れるものではないわけです。

とりわけ水俣にコミットしていけば行くほど、その水俣っていう場所での市民社会と、それから漁民たちの生きている社会とのズレが見えてくる。漁民たちの生きている社会は、それは明らかに、みんなが市民と呼んでいる、その人たちが住んでいる社会と違うものとして認識されているんです。それは水俣市民が攻撃するからです、水俣病者に。水俣病という命名すら攻撃の対象になる。だから水俣病を違う名称で言えとか、それをたとえばハンセン病っていう命名のように、この水俣病の発見者の名前を、外国人の名前をつけたらどうかとかですね、水俣市の名称を変えろとか、いろんなことが言われるわけです。非難や攻撃の対象になっているということですから、そうすると市民というものに対する批判もでてくるのは当然です。

しかし、患者たち自身の中から「もやい」ということについての、意識的な働きかけが出てくるんです。徹底的に排除されてきた人々の中から市民、あるいは市民社会に手を差し伸ばすということが出てくるんです。それはもう非常に具体的なところでいろいろな形で出てくるんです。例えばハイヤ節を国際水銀会議場で踊るんですが、水俣病の胎児性患者たちと水俣市の子どもや若者たちが隔てなく、車いすに乗った人たちも含めて、そこに大きな踊りの輪を作ろうとする。そういうプランを、杉本栄子さんが積極的に出して、振り付けもする。そういうふうに水俣病の方が積極的に市民に手を差し伸べるという動きがある中、市民の中にも今度は水俣病展をやるっていうとき

に協力する人が出てくる。水俣の駅から会場までの商店街に水俣病展ののぼりがはためいたんですね。水俣の人たちもこんなことは初めてだと言ったんですけれども、それは商店の人たちが水俣病展を支えるという意識を持ったからなんですね。実際に水俣病展の実行委員会の中にも水俣の商店の人たちとか、会社員なんかが入ってくる。その人たちの話を聞いてみれば昔は申し訳なかったというんです。水俣の市民は水俣病者を支えなかった。そのことを申し訳なく思うって言いました。ずーっとそのことを重荷に、それを抱えてきたと言う。お父さんがチツソの会社に勤めていた。そうすると一家をあげて水俣病患者を批判するということが出てくる。だけどそのことがずっと気になっていたという。そのことを謝りたいと思ってこういう活動に参加する。そういう人たちが出てきた。

だからこれはそういう水俣病患者たちとそれから水俣の市民たちの双方に関わる、これはまさに「エッジ」っていうことなんですよ。エッジが交差する、接点を持つところが出てきた。それはトータルな水俣病者たちとトータルな水俣の市民社会との和解でも連携でもないんですよ。それぞれの思いと意識が表れたところがエッジとなってそれが繋がっていく。肩を並べてやっけて行くということがありうるんです。そういう仕方だとぶん接点を持たれ、かつ連携プレーが行われていくんですよ。産業廃棄物処分場建設反対運動でもまたそうですね。だけどこれが本当に細々とした患者と市民の繋がりがかっていうとそうじゃなかった。市長選の話をしましたけれども、市長選で圧倒的に反対派の市長を立ち上げてしまうっていう、それだけの繋がりの大きさが証明されたんだと思いますね。最初はやっぱり小さなつながりなんですね、小さなつながりだけれども私は質的には非常に強固な繋がりだったんだと思うんです。水俣病展をやったときに患者たちがもう放っというてくれ、「寝た子を起こすな」というんです。いや、「寝た子は起こさなくちゃいけません」って、僕らがいうわけです。これってちょっとおかしいわけですがけれどもね。やっぱりやってもらってよかったという声にはなるし、それからこんなことがあったというのは初めて知った、という子どもたちの声があったし、そういう声がいくつもの細い流れになって繋がっていく。

市民社会の中で動き出すそういうエッジがいくつもあるし、それがなければ、実際に人間の政治は十分な力になりえないんですね。だから市民社会の中で課題を担うエッジが生まれることが必要です。それから官庁もそうですよ。官庁はどうしようもない壁ですけども、しかしその壁のなかにも人間がいるんですね。市民的な官僚もいるんです。あるいはそういうものを市民が作り出すっていうか。環境省の極めて市民的な役人、市民的な課長がいるんです。その課長との関係の中で動いていくものがあるんです。もちろん内閣が、あるいは自民党が何か言ってしまえば、そんなものは吹っ飛んでしまうわけですね。課長が何の抵抗もできない、それはもう明らかです。しかし、小さいけれどもそういう変化が今生じているんです。前よりましですよ。全く拒絶反応だったところをそうじゃない人たちがぼつんぼつんと出てきている。それが場合によったらある種の連携プレーになっていくんですね。水俣フォーラムを支えてくれるような役人も企業も出てくるんですね。

上野登という学者が、北九州に照葉樹林帯を作った。だけどそのためには、純粋なボランティアだけではとてもできなかったんですね。行政と企業の協力を取り付けなかったらできないことです。上野さんはそのことを本に書いた。池内紀さんが、この本の書評の中で、「鍛えられた足腰さえあれば、時には膝をしてもいい」といっている。鍛えられた足腰さえあれば、というところを抜きに膝を屈してもいい、というふうになってしまう人がむしろ多いのが問題なんですけれども。

市民活動に響き合うエッジがわずかといえども、行政にも企業にもあるんです。それで企業にとっての責任の取り方っていうのは金を払うということ以外に他にやり方があるのだろうか、という質問です。私は、被害者に恒久的な救済対策を取ることから、企業活動を通して共生的な社会の方向性をプレゼンテーションすることまで、企業にできることは沢山あります。しかし、金を払うということは賠償金の考え方によりますね。現代損害賠償論の論理というのは、産業の発展を止めることはできない、そうするとそこに常に犠牲者が現れる。その犠牲者に対しては金で賠償すればいい。金によって平衡を回復する。それが現代損害賠償論の論理です。ハンセン病にしろ、あるいは

はカネミ油症にしる、森永ヒ素ミルクの場合にしる、結局金で償うという形を取ってるんです。

しかし、この平衡説とは異なった意味を賠償金に求めた人もいます。三井三池の裁判で賠償金を申し立てるときに1円を申し立てた人がいた。1円の賠償金って何なんだろう。市場的な等価交換という発想じゃあ全くないわけですよ。賠償金として1円を要求するっていうのは、心からの謝罪ということにつながっているんだろうと思うんですね。今の現代損害賠償論のロジックでいえば金っていうのは所詮そんなもんです。だけど同時にそんなもんですっていうものの中にね、意味を込めることができる。

だけど先ほどお話したように緒方正人さんたちがそれをさらに乗り越えていこうということを考えたわけですね。これを形にするためにはどうしたらいいんだろうか。例えば、環境会計っていう、そういう会計を、今どの企業も取り入れているでしょう。それと同じように、私は共生会計という会計の立て方ってないんだろうかと思うわけです。皆さんに考えてもらいたい。とりわけ経営学やってるような人には、水俣病者のほうから言うと、いつまでも被害者と加害者っていう二分法的な息苦しい形を抜け出したいということがあるんですね。だから加害者の中にも人間を掬い出していこうとする。自主交渉のときなんかもそうなんですよね。社長というその位置にもう、必死にしがみついている人をそこから引き剥がそうとするわけです。それでそこから人間を掬い出す、希望を持った人間を掬い出してくることを考えるんですね。

それで、それが現実的かどうかという問題以前に、あるいはそれ以後に、アクチュアリティを経験したいということがありますね。時代の中で私が関わりを持ったアクチュアルな場所、例えば大本、若者、コミュニオン、それからボランティア活動、市民活動、水俣、高畠との関わり等々、これは次から次へと乗り換えになってないんです。お話したことは今でも、ずっと続いているんです、私の中で。実際にその関係も続いています。大本との関わりもずいぶん長いわけだけれども、今でも続いています。権力派に反旗を翻した人たちがネットワークの活動を始めています。宗教を超えたネットワークです。

そういう中でまたあらためてお付き合いの仕方が深まってくる。水俣との関わりもそうですね。水俣との関わりも済んだことじゃなくてまだまだずっと続いている。並行した関わりになっているんですか、という質問があったんですけども、実際そのとおりですね。並行しているんです。全てのことが、並行し、重なり合い、交差している。並行しているんだけれども、例えば水俣と、高島との関わりっていうことになると、それは全く別個のことが並行してるんじゃないくて、相互に響き合っているし、高島での水俣展のように、交差もしている。

水俣なら水俣との関わり方、あるいは立ち方が、その意味では一貫性があるんだけど、その中で変わっていくんですね。私自身が変わっていくし、それから水俣のほうも変わっていくんですね。私がボランティア学会を播磨靖夫さんたちと立ち上げていったときに、宇井純さんが、私がやって来たことはボランティア活動だったと言って入って来られた。そのことはみんなにインパクトをもたらしているんです。宇井純さんがボランティアなら、ボランティアはじゃあどこに立つんだって、市民社会の多数派の位置に立ってるわけじゃない、市民社会の裂け目、エッジに立っていて、周縁と響き合っていることがはっきりしてくるわけです。ボランティアの立ち方がそこから人間の政治のほうへ近づいていくし、そのことが分かってくると今度は逆に水俣病患者たちが市民活動に心を開いてくる。並行しているんだけれど相互の変容があるんですよ、それぞれに。

だからそういう点でいうと反公害の運動ということからはじまったんでしょうけれど、遥かにそういうことを超えていく、それで学問のほうが公害という問題の立て方は今や古いといって環境というふうにいっちゃうんですね。だけど現場で言えばむしろ、環境っていうふうな問題を立てたことで失われていくものが認識されて来ていますね。もう一回公害ってことをしっかりと見取りながら、しかもそれを狭い意味の反公害に閉じ込めるのじゃなくて、もっと広い形の人間の政治のほうに拡張しようとしている。そういう状況です。

チッソは企業としては、水俣の能の奉納に参加しないんです。その意味で

は、加害責任の共有というふうにはなっていないんです。だけど、個々の人たちが参加する。こういうことは前例がなかったことなんです。実際私が、能を奉納するための実行委員会に行くと、その実行委員会の中に楽しそうにしている若者がいるんです。その若者はチツソに勤めている人なんです。真昼間に委員会にいて、とうとうと自分の意見を述べている。で、お前さんこんなところにいていいのって、みんなが彼が首になるぞって心配するんですよ。その社員の若い人は、いやあ、首になったっていいですよ、なんていってね、その場にいるんですけれども、チツソの社員が実際、かなり自由な仕方アイデンティティ抜きでその場にいるわけです。そういうことが、全体化されてはいないんです。チツソが全員参加するということはたぶん永久にありえないでしょう。だけどそういう人が一人、二人いるということがすごく重要ではないでしょうか。

私は言われてみれば若者に関心をずっと持っているということは、確かにそうですね。どうしてかなあ。自分ではよくわからないけれど、E.H. エリクソンの言い方でいえば、extended youth 引き伸ばされた青年期を殊更に未完の状態に置いておく、たぶん自分の中のその問題かもしれないんです。アイデンティティなんていうものはありえないし、それからそんなものを私は獲得しましたって言ったとたんにそれはアイデンティティじゃないし。だからアイデンティティは永遠に獲得できないものです。民族的なアイデンティティっていうふうになってしまうんだけど、そういうものじゃないようなアイデンティティ、その人にとっての真正なアイデンティティということでは、そんなものはやっぱりないのかもしれないですね。だけど、それが、自分の中で青年のイメージに置き換えられてとらえられていくということはあると思う。若者のイメージで。その若者ってなにかっていえば、変わるっていうことですよ、他者と出会って自他ともに変るっていうこと。世の中書き換えちゃうっていうことですよ。だからたぶんそれを自分の中で保っていくっていうことが、若い人たちとの付き合いとか関心に繋がっていくのかもしれないですね。

私の最初の本は、『やさしさのゆくえ = 現代青年論』（薩摩書房）でした。最初の本っていうのは多分に尾を引くんじゃないですか（笑）。最初の本になにもかもあるんです。全てを投げ込むんですね。なにやっても、最初の本のことが反復する、記憶みたいにしてね。天田さんもそうでしょう。自分の原点は何か、と言われたと思うんです。これは立岩さんの言葉だと原風景かな。

私の原風景は、こういう光景です。二階の部屋から洪水の風景が音もなく広がっているのが見える。満々とした茶色の洪水が見える。それが一階の軒先まで来てるんです。二階の窓から船に乗って、洪水に浸かった家を去る。その光景なんですね。その原風景に人はいないのです。人は見えない。だけどその舟があって、洪水があって、水に浸かった家がある。そこから私が助けられるというか、舟に乗っていく寸前の光景。あるときそのイメージを語ったら親は驚いたんです、実際にそれはあったことだったと。私は宇都宮に生まれましたが、父が数学と物理学の教員で、職場の関係で足利に移った。その足利でそういう洪水があったんですね、渡良瀬川の氾濫だったんです。それが私の最初の原風景です。

いくつもの原風景が絵のようにして自分の中で反復されるわけですね。渡良瀬川に関わる原風景に、続きがあります。群馬県の太田市のおじいさんの家に小さいとき遊びに行くんです。行く度に「偉いお上人さん」の話を聞かされるんです。蓑笠つけて、雨が降ると田の状態はどうかと行って訪ねて来る。変なじじいって思っていたんですが、名前も知らなかった。ずいぶん後になってから田中正造と知るわけです。渡良瀬川の洪水の原風景と初めて結びついた。

最近のことですが、谷中村跡地にミニスカートで石牟礼道子さんが立っている古い写真を見ました。水俣病者たちは水俣病闘争のかなり早い時期に、足尾・渡良瀬川・谷中村跡地を訪れています。田中正造と谷中村の人々の闘い方に大いに学ぶところがあり、その精神は水俣病闘争の骨格に受け継がれています。水俣の原風景と谷中村の原風景は響き合っています。ですから、渡良瀬川周辺で水俣展と田中正造・谷中村展を一緒に開きたいね、と宇井純

さんと話していましたが、宇井さんは亡くなってしまった。でも、これは実現したい、私の夢ですね。理不尽なこと、不条理なことの経験から、初発の問いが生まれます。後知恵として言えることですが、その問いは、個人史と歴史の交差する場所に生まれます。問いは最初確たる形を取っていないけれども、手放さない。身体化されているから手放せない。問いの探究は他者を呼び寄せます。他者との道行きがさらなる問いを生みます。問いと探究の、反復・変奏・連鎖が、ライフサイクルと歴史の転回の中で、進行します。複数の他者と織りなす研究の中に、再び初原の問いに遡行し、かつ来たるべき問いを予兆して、戦慄の中に、両者が円環をなして出会う場所を創る探究行為が始まります。見果てぬ夢のように。

(天田) せっかく議論が盛りあがってきたところで申し訳ないのですが、だいぶ時間が超過しておりますので、ひとまずはここで終了させていただければと思います。なお、ひとつだけアナウンスをしておきます。今日 18 時からいつもどおりの代わり映えのしない店で、栗原先生を囲んで懇親会をすることになっています。この場で十分話せないことについて、あるいはもっと聞きたいこと、たくさんあるかと思いますが、ぜひこの懇親会の中で直接いろいろ話をさせていただければと思っています。すでに 25 分超過ですので、ひとまずはこれで今日の栗原先生を囲んでのグローバル COE「生存学」創成拠点の研究会「歴史のなかにおける問い 栗原彬先生に聞く」を終了させていただきます。栗原先生、本日は本当にお忙しい中、また長時間にわたって貴重なお話をしてくださいまして、まことにありがとうございました。参加して下さった皆さんにもお礼申し上げます。